

## 国士館史関係資料の翻刻並びに補註

## 第六卷

### 凡例

- 一 ここには、国士館史編纂のために調査収集した資料のうちから、翻刻・校訂と補註が終了し、重要度が高いものを順次紹介する。
- 一 資料には、巻別に適宜、通し番号と表題を付し、その下に（ ）で出典を略記した。
- 一 資料は、漢字・仮名遣いとも、できるだけ原本に忠実に翻刻したが、一部に句読点を補い読みやすく改めた。
- 一 資料中の漢字は、原則として常用漢字に改めた。ただし、常用漢字にないものおよび地名・人名など特に必要と認めたものは、原本のままとした。
- 一 現在では読みにくくなった語句には、平仮名でふりがなを付したが、もともと原本にあるふりがなは片仮名で表記した。
- 一 資料の成立事情及び資料中に使用される用語で意味を解しにくいものには、簡略な補註を付し、読者の理解に資した。
- 一 資料の翻刻・校訂は、国士館史資料室収蔵の原本、ないしは原本から作成した忠実な複製資料によった。

一 昭和二十七年一〇月 国士館短期大学設置認可申請書原本（国立公文書館所蔵）

（内表紙）

「国士館短期大学設置認可申請書 正本」

短期大学設置認可申請書

この度国士館短期大学<sup>\*1</sup>を設置したいと思いますから学校教育法第四条（及私立学校法第五条）によつてご認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします。

昭和二十七年十月二十日

設立者

学校法人国士館理事長 柴田徳次郎印

文部大臣 岡野清豪殿

書類目次

一、国士館短期大学設置要項

二、学則

三、校地（図面添付）

四、校舎等建物（図面添付）

五、図書標本機械器具等施設概要

六、学科又は専攻部門別学科目

七、履修方法

八、学科又は専攻部門別学生定員

九、職員組織

一〇、設立者に関する調

一一、資産

一二、維持経営の方法

一三、現在設置している学校現況

一四、将来の計画

一五、併設の場合の調

以上

第一 国士館短期大学設置要項

一、目的及使命

本学は、学校教育法の問題に基き広く一般の基礎教育に関する学術に更に専門の文学並に経済学に就いての知識技能を修得させることを目的として、世界文化の進展に貢献するとともに、教育界実業界等における社会人を育成することを使命とする。

二、名称

国士館短期大学

三、位置

東京都世田谷区世田谷一丁目一〇〇六番地

四、校地（図面添付）

総坪数

一一、二八九坪三合五勺

専用

二、五〇〇坪

共用

八、七八九坪三合五勺

五、校舎等建物（図面添付）

総坪数

一、〇〇八坪二合一勺

専用

五五八坪八合八勺

共用

四四九坪三合三勺

六、図書標本機械器具等施設概要

図書

総数

二六、〇二六冊

専用

二二、六〇七冊

共用

三、四一九冊

標本

二六点

機械 器具

三七三点

七、学部及び学科の組織並びに附属施設

国文科

経済科（第二部）

附属図書館

八、学部及び学科目又は講座

一般教育科目は国文科、経済科とも共通

一般教育科目

(イ) 人文科学関係

哲学、倫理学、文学、歴史

(ロ) 社会科学関係

法学（日本国憲法を含む）、経済学

(ハ) 自然科学関係

数学、統計学、生物学

二、外国語

英語、中国語

三、専門科目

国文科

国文学史、国文学概論、国文学講義、国文学演習、国文学特殊講義、国語学史、国語概論、国語学演習、言語学、日本漢文学史、中国文学史、中国文学講義、中国文学演習、文学概論、文芸思潮

経済科

経済原論、経済史、経済事情、世界経済、経済政策第一、経済政策第二、金融論、財政学、交通論、保険論、商業学、簿記及会計、経営学、憲法、民法、商法、外国書講読、英会話、中国語、商業英語

四、教職課程

教育原理、教育史、教育心理学、各科教育法、教育実習

五、体育

実技、講義

九、履修方法概要

一般教育科目、専門科目共に第一学年より履修し、専門科目は後学年において、特に之を増加する。

(イ) 学生は本学各学年に開設する講座、科目の中、必修科目の外選択科目より必要単位を選択履修しなければならぬ。

一般教育科目中人文、社会、自然の各系列に亘り、それぞれ四単位以上十二単位以上を、専門科目においては二十四単位以上を、且つ設置されたる科目中より二十四単位以上を取得しなければならない。

外国語（英語）は必修として取得しなければならない。国文科学生は中国語を必ず履修しなければならない。

体育は講義、実技を必ず履修しなければならない。

(ロ) 中学校教員志望者は、教職課程の科目十五単位以上を取得しなければならない。

(ハ) 本学に二年以上在学し所定の単位数を取得した者に卒業証書を授与する。

一〇、職員組織の概要

職名	区分
教 学 長	専 任
教 員	兼 担
助 教 授	兼 任
助 手	計
講 師	備 考
事務員	
図書館長	
事務長	
書記	
雇 員	
医 師	
その他	

一一、学部及び学科別入学学生定員

国文科 四〇名

経済科 四〇名

一二、設立者



学校法人国士館

一三、維持経営の方法及び概要

授業料、入学金、入学検定料、諸証明手数料、維持員会寄附、資産より生ずる果実を以て、維持経営する。

一四、大学開設の時期

昭和二十八年四月一日

一五、開設学年

第一学年

一六、併設の場合

本短期大学は国士館高等学校を併設する。

第二 学則

国士館短期大学々則

第一章 目的及使命

第一条 本学は学校教育法の精神に基き、広く一般の基礎教育に関する学術と、更に専門の文学並びに経済

学に就いての知識、技能を修得させることを目的とし、世界文化の進展に貢献するとともに教育界、実業界等における、良き社会人を育成することを使命とする。

## 第二章 学科の組織

第二条 本学は国文科及び経済科に分ち、経済科は夜間授業とする。

## 第三章 教職員の組織

第三条 本学に左の職員を置く

学長、図書館長、事務長、教務課長、学生課長、庶務課長、経理課長、書記、雇、校医、保健婦

第四条 本学に左の教員を置く

教授、助教授、助手、講師

第五条 学長は本学を代表して、校務を掌り所属教職員を統督し、学則の定める範囲内において、細則を設けて、これを施行する。

第六条 図書館長は学長の命によつて、図書館に関する事務を管理する。

第七条 事務長は学長の命によつて、校務を管理する。

第八条 教務課長は上司の命を受けて教務全般に関する企画をたて、事務を処理する。

第九条 学生課長は上司の命を受けて、学生の監理補導に関する事務を処理する。

第十条 庶務課長は上司の命を受けて、庶務に関する事務を処理する。

第十一条 経理課長は上司の命を受けて、学校経営上の経理に関する事務を処理する。

第十二条 書記はそれぞれ所属課長の命を受けて、事務に従事する。

第十三条 校医は学校全般の保健衛生に従事する。

第十四条 教授は学長の命を受けて学生を教授し、その研究を指導し、専攻する学科の研究に従事し、担当する専門学術の進歩を図り、且つ学生の学習及び補導上の責任を負ふ。

第十五条 助教授は学長の命を受けて、教授の職務を助ける。

第十六条 助手は学長の命を受けて、助教授の職務を助ける。

第十七条 講師は学長の委嘱によつて、当該専門科目の講座又は講義を担当する。

#### 第四章 教授会

第十八条 本学教授をもつて教授会を組織する。

第十九条 教授会は、各科教授をもつて組織する。特に定める場合は、助教授及び他の教職員を加えることが出来る。

教授会は左の事項を審議する。

一、人事に関すること

二、授業及び研究に関すること

三、入学志願者銓考に関すること

四、試験及び報告論文等の審査に関すること

五、聴講生及び特待生、給与研究生の銓考に関すること

六、その他大学に関する重大な事項

第二十条 教授会の規程は、別に之れを定める。

第五章 学年、学期及び休業日

第二十一条 本学の学年は四月一日に始まり、翌年三月三十一日を以て終る。

第二十二条 学年を分ちて二期とする。

前期 四月一日より十月三十一日まで

後期 十一月一日より翌年三月三十一日まで

第二十三条 本学の休業日は左の通り定める。

祝 日

休 日

日曜日

本学創立記念日

春期休業（三月二十一日から四月五日まで）

夏期休業（七月二十一日から九月十日まで）

冬期休業（十二月二十五日から翌年一月十日まで）

第六章 学科目

第二十四条 各学科別講座科目は別表第一による。

別表の外必要に応じて、特別講義又は演習を開設することがある。

第七章 履修方法及び課程終了

第二十五条 各専攻学科において、毎学年開設する学科目及びその単位数は別表第二による。

第二十六条 毎学年における開講科目の詳細は、その学年初めに決定する。

第二十七条 学生は毎学年度初めに、その学年の学修科目を届出なければならない。

第二十八条 学生は二年以上在学し、必修科目の外選択科目の中から必要な科目を選択履修し、一般教育科

目の中人文科学、社会科学、自然科学に関する科目の各系別にわたり、それぞれ四単位以上計十二単位以上、外国語四単位以上、専門科目二十四単位以上、更に全科目中より二十四単位以上、体育二単位を取得しなければならない。

第八章 試験及び卒業

第二十九条 試験は学科目試験とする。各学科試験は単位終了のとき又は学年末に行ふ。

但し、休学中の者は試験を受ける資格がない。

第三十条 追試験の期日は学長がこれを定める。

第三十一条 学科試験の評点は優、良、可、不可に分け、優は百点―八十五点、良は八十四点―七十点、可は六十九点より六十点、不可は六十点未満とし、六十点以上を合格とする。

第三十二条 正当な理由がなくて、試験を受けなかつた該科目の評点は零点とする。

第三十三条 本学に二年以上在学しない者及び、定められた課程を修了しない者は、卒業することができない。

第三十四条 卒業者の決定は教授会に報告して、その承認を必要とする。

第三十五条 削除

第三十六条 削除

第九章 入学、退学、休学、転学

第三十七条 入学は毎学年の初めとする。

第三十八条 本学に入学し得る者は、左の各号の一に該当する者とする。

(一) 高等学校を卒業した者

(二) 外国において、学校教育における十二年課程を修了した者

(三) 文部大臣の指定した者

(四) その他大学において、高等学校を卒業した者と、同等以上の学力があると認めた者

第三十九条 前条の資格をもつて入学を志願する者には、本学所定の入学試験を課し、之れに合格した者は

入学を許可する。

第四十条 他の大学から本学に転入学を希望する者は、その大学長の承認のある場合に限り、教授会の銓衡を経て、入学を許可することが出来る。

他の大学を退学した者で、本学に編入学を希望するものについては、前項に準じる。

第四十一条 入学志願者は規定の書式による入学願書に、履歴書、戸籍抄本、出身学校の調書（証明書）及び、最近の半身像の写真、定められた入学検定料を添えて提出するものとする。

転入学及び編入学を志望する者に限り、在学した大学の履修単位及成績証明書を添付しなければならない。

第四十二条 入学の許可を得た者は所定の期日までに、定められた書式による宣誓書、在学保証書その他必要書類、入学金、授業料等を添えて、入学手続を完了しなければならない。

期日までに、手続を完了しないときは、入学を取消することがある。

第四十三条 保証人は、父兄又は父兄に代つて本人を保証することが出来る者に限る。

第四十四条 保証人が遠隔の地に居住している場合は、別に副保証人を設けなければならない。

第四十五条 副保証人は、東京都内又は、その近傍の地に居住し、独立の家計を立てている成年者とし、且つ本学において適当と認めた者に限る。

第四十六条 保証人及び副保証人は、その保証する学生の在学中の事項につき、その責任を負ふものとする。

第四十七条 学生及び保証人又は副保証人は、その身分、住所、職業等に異動が生じた時は、直ちに届出なければならない。

第四十八条 保証人又は副保証人に変更の必要が生じた時は、直ちに届出て許可を受けなければならない。

第四十九条 学生が病気又は事故のため欠席する時は、必ずその理由を具して届出なければならない。

第五十条 学生が病気又は事故のため、六ヶ月以上にわたつて、通学できない場合は、許可を得て、休学することが出来る。

第五十一条 学生がやむを得ない事情で退学する時は、理由を具して保証人連署の上、許可を受けなければならない。

第五十二条 前条の規定によつて退学した者が再び入学を願出た時は、その理由、在学中の成績及び勤怠<sup>(備)</sup>を



銓衡の上、教授会の承認を経て再入学を許可する。

第五十三条

左記各号の一に該当する者は除籍する。

- (一) 性質が不良で改善の見込のない者
- (二) 学力が劣等で将来成業の見込のない者
- (三) 無届で三ヶ月以上連続欠席した者
- (四) 授業料その他規定された納附金を納附しない者

第六章<sup>Ⓐ</sup> 学生の定員

第五十四条

本学の学生定員は左の通り定める。

国文科 八〇名

経済科 八〇名

毎年入学を許可する学生定員

国文科 四〇名

経済科 四〇名

第十一章 授業料、入学金

第五十五条

本学に入學を志願する者は、入學願書を提出するとともに、入學検定料を納附するものとする。

第五十六条 入学の許可を得た者は、直ちに入学金を納附しなければならない。

第五十七条 授業料は毎年初めに納入するものとする。但しやむを得ない事情のあるものは、許可を得て分納することが出来る。

第五十八条 入学検定料、入学金、授業料の額については別に定める。

第五十九条 既に納入した入学金、授業料は、どのような理由があつてもこれを返還しない。

第十二章 委託生、聴講生、外国人学生

委託生

第六十条 他の大学、研究機関、その他から特に本学開設学科の履修を、目的として指導を委託された者があるときは、教授会の銓衡を経て、委託学生として入学を許可することができる。

聴講生

第六十一条 相当の学力があると認められる者で本学に開設された学科目若は数科目につき、聴講しようとする者がある時は、聴講生として入学を許可することができる。

第六十二条 聴講生の入学資格は、左記各号の一に該当する者であることを要する。

一、高等学校を卒業した者

二、その他教授会で前号と同等以上の学力があると認められた者

第六十三条 聴講生で、その履修学科目の試験に合格した者には、その学科目に関する修了証書を授与する。

第六十四条 聴講生に関しては、前各条に規定した以外の事項は一般の規定を準用する。

#### 外国人学生

第六十五条 外国人で本国の許可を得て、本学に入学を志望する者があるときは、教授会で銓衡した上入学を許可する。

第六十六条 外国人学生の入学に関し前条に規定した以外の事項に関しては一般の規定を準用する。

#### 第十三章 公開講座、通信教育

第六十七条 本学は在学生のための講座、科目以外に必要なに応じ特別の講座を設け、これを一般大衆の教養のために公開することがある。

第六十八条 公開講座に関する細則は別に之を定める。通信教育については、将来適当な時期にこれを実施する。

#### 第十四章 賞罰

第六十九条 本学の学生で、学術が優秀で操行の善良な者は教授会の推薦によつて、特待生の待遇を与える。特待生となつた者は、次学年の授業料を免除する。

第七十条 本学を卒業した者で学力優秀で操行が善良であり、将来有望な者には教授会の銓衡を経て、学資

を給与し、その研究を継続させ、又は留学させることがある。

第七十一条 特待生で学業、研究を怠り、若は不都合な行為があつた者は直ちに、その待遇及び特権を停止する。

第七十二条 本学学生で学則に違反し校内の風紀を乱し、校具を汚損し、又は学生の本分に叛する行為のあつた者は、その軽重に従つて懲戒を行ふ。

懲戒は謹慎、停学、放校の三種とする。

#### 第十五章 附属図書館

第七十三条 本学に附属図書館を設ける。

第七十四条 本図書館は国士館短期大学及び同附属高等学校の教職員及び学生生徒の研究並びに教育に必要な図書を、収集保管し、閲覧させることを目的とする。

第七十五条 本図書館の閲覧時間は、別に之を定める。但し祝日、本学記念日、日曜日は休館とする。尚必要に応じ、適宜休館することがある。

第七十六条 定められた規則に違反し、又係員の指示に従はない者は、入館を拒絶することがある。

第七十七条 図書閲覧、貸出その他に関する細則は別に之を定める。

#### 第十六章 保健施設

第七十八条  本学は学校教職員及び学生のために、医務室を設置し、一般養護に関する任務の外、健康増進に関する指導を行ふ。

第七十九条  医務室に左の職員を置く。

医師、保健婦

第八十条  医務室に関する細則は別に之を定める。

附則

第八十一条  本学則は昭和二十八年四月一日から施行する。

別表第一

学 科	学科又は講座	必修単位	選択単位	備 考
一般教育	一般教育 人文科学関係 哲 学 倫 学 文 学 歴 史 社会科学関係 法 学 経 済 学 自然科学関係 数 学	一八 二 二 二 四 二 二 二	一二 二 二 二 二 二 二 二	東洋倫理学を含む  憲法を含む

[illegible]

	教職課程	経済科
<div> <div> <div>実講</div> <div>育</div> <div>技義</div> </div> <div> <div>体</div> </div> </div>	<div> <div>教職課程</div> <div> <div>教育心理学</div> <div>教育原理</div> <div>国語科教育</div> <div>社会科教育</div> </div> </div>	<div> <div> <div> <div>世界経済</div> <div>金融論</div> <div>財政学</div> <div>簿記及会計</div> </div> <div> <div>保険論</div> <div>交通論</div> </div> <div> <div>経営学</div> <div>商業学</div> </div> <div> <div>商英</div> <div>商業</div> </div> <div> <div>民業</div> <div>憲法</div> </div> <div> <div>商法</div> <div>外国書講</div> </div> <div> <div>外国会話</div> <div>英語読</div> </div> <div> <div>英会</div> <div>中国語</div> </div> </div> </div>
<div> <div>一一二</div> </div>	<div> <div>三</div> <div>四</div> <div>四</div> <div>二</div> <div>二</div> <div>四</div> <div>一九</div> </div>	<div> <div>二</div> <div>四</div> <div>四</div> <div>四</div> <div>四</div> <div>四</div> <div>四</div> <div>四</div> </div>
	<div> <div>二</div> <div>二</div> </div>	<div> <div>二</div> <div>二</div> <div>二</div> <div>二</div> </div>
	<div> <div>青年心理学を含む</div> </div>	

別表第二

国文科	外国語	一般教育	部門	学科専攻
<div>国文学史</div> <div>国文学特講義</div> <div>国文学演習</div> <div>国文学概論</div> <div>国文学史</div>	<div>外国語</div> <div>中国語</div> <div>英語</div>	<div>社会科学関係</div> <div>自然科学関係</div> <div>経済学</div> <div>法学</div> <div>社会科学関係</div> <div>歴史学</div> <div>文学</div> <div>倫理学</div> <div>哲学</div> <div>人文科学関係</div> <div>一般教育</div>		学科名
四四四四四四〇	二四六	四二二四四四二四四	第一年度	開設年度及び単位数
二二四四四四二八	二四六		第二年度	
二六八八八八六八	一四八二	四二二四四四二四四	計	
		<div>憲法を含む</div> <div>東洋倫理学を含む</div>		備考



経済科	国文科
<p>           商憲民商商經保交簿財金世經經經經經經濟            業業業營險通記政融界濟濟濟濟濟科            英法法法語學學論論計學論濟二一情史論            二四四四二二四二四         </p>	<p>           文文中国中国中国日本言語国国            芸學文学文学文学漢語語語學學            思潮概論習義史史史學學概論            二二四四二二二二         </p>
<p>           四二二二四二二四四四四二二二四四            三六         </p>	<p>           四二二         </p>
<p>           四二二四四四二二四四四四二二二四四            六〇         </p>	<p>           二二四四四二四四二         </p>

第三校地（図面貼付）

種別	専用	共用	計	所在地	備考
校舎敷地	二、五〇〇・〇〇坪	三、五八八・三五坪	六、〇八八・三五坪	世田谷区世田谷一ノ一〇〇六	
運動場		五、二〇一・〇〇坪	五、二〇一・〇〇坪	世田谷区若林町二九三	
計	二、五〇〇・〇〇坪	八、七八九・三五坪	一一、二八九・三五坪		

經濟科		教職課程	
外国書講読	英國會話	職業課程 教育原理 教育心理學 教育史 國語科研究法 社会科学教育法 教育実習	実體 講義 義技
二	一〇	二四四	一一二
二	一一	三四四	
二	二二	二四四	一一二
二	二二	二四四	一一二
		青年心理学を含む 国文科學生に課す 社会科学學生に課す	

第四
 校舎等建物（図面添付）

第一表

種別	専用	共用	計	建物様式	室数	備考
一 号 館	九八・二五坪		九八・二五坪	木造スレート葺	一六	
図 書 館	一一九・五〇		一一九・五〇	同	一	
講 堂	一六・二〇		一六・二〇	鉄筋コンクリト	二	
講 堂	七六・五一		七六・五一	木造スレート葺	七	
屋 内 体 操 場	三三三・二五坪		三三三・二五坪	木造瓦葺	九	
二 号 館		二一七・五二坪	二一七・五二坪	木造スレート葺	三	当分使用せず
寄 宿 舎		九二・七六	九二・七六	木造瓦葺	五	
事 務 室		二一・〇〇	二一・〇〇	木造トタン葺	三	
倶 楽 部		三六・五〇	三六・五〇	木造瓦葺	五	
館 長 公 舎		四四・七五	四四・七五	木造瓦葺	九	
農 場 建 物		二四・二五	二四・二五	木造スレート葺	五	
小 便 宿 舎		一〇・七五	一〇・七五	木造トタン葺	三	
守 衛 控 室		一・八〇	一・八〇	木造瓦葺	一	
学 生 控 室	二三・五〇		二三・五〇坪	木造トタン葺モルタル塗	一	（便所を含む）
計	五四三・七一	四六四・五〇	一、〇〇八・二一坪			

第二表

建物種別	一 号 館	図 書 館
室名	一番教室 二番教室 三番教室 生物教室	全準備室 演習室 その他
一室・坪数	二〇・〇〇 一六・〇〇 一四・〇〇 一〇・五〇	五・二五 八・〇〇 二四・五〇
用途	講義室 〃 〃 実験室 講義室 研究室準備室	学生図書閲覧室 国文科第一室 同 第二室 同 第三室 経済科第一室 同 第二室 一般研究室
収容人員	六〇名 五〇名 四〇名 三〇名	五〇名
室数	六	一二
総坪数	九八・二五坪	一一九・五〇
備考	短期大学 専用校舎	採光は充分考慮して改造す 座席三六名 喚起は回転窓を利用す 短期大学専用

講堂	書庫		同 学 守 小 農 学 衛 便 場 便 控 宿 建 所 室 舍 物	事 務 室
広間 控室 その他	書庫	学長室 事務室 事務室 事務室 廊下その他		一室 二室 三室 廊下その他
六四・七四 一一・七七	一六・二〇	一二・〇〇 一〇・〇〇 七・五〇 六・〇〇 一五・〇〇		各六・〇〇 三・〇〇
講堂兼柔道場	図書格納用	学長事務室 会議室 一般事務用 図書事務室 廊下、玄関、便所等	小使住宅用 守衛詰所	学生教務用 庶務会計用 宿直室
三〇〇名				
二	一		一	三
七六・五一	一六・二〇		二〇・〇〇 四・五〇	二一・〇〇
〃	短期大学専用		短期大学専用	

寄 宿 舎	二 号 館	屋 内 体 操 場
その他 玄関、廊下 〃 6 〃 5 〃 4 〃 3 〃 2 教室 1 教員室 会議室 校長室	その他 便所 玄関 物置 研究室 体操場	その他 便所 玄関 物置 研究室 体操場
一・五〇	六三・三〇 六・二二 一六・〇〇 一六・〇〇 一六・〇〇 一六・〇〇 二〇・〇〇 二〇・〇〇 二〇・〇〇 二〇・〇〇 二〇・〇〇 二〇・〇〇 二〇・〇〇	二八・〇〇 一九六・〇〇 七・〇〇 〇〇
舎官室	特別教室 〃 〃 〃 〃 講義用 教員控室 教員会議用 校長事務室	運動具格納用 体操場兼剣道場 体育研究室
一名	一〇名 四〇名 四〇名 四〇名 五五名 五五名	
三四		七
九二・七六		二三三・〇〇
〃	共用	短期大学専用

第五
 図書、標本、機械器具等施設

一、図書

種別	専用	共用	冊数		備考
			内国書	外国書	
一般教育図書					
人文科学関係		一、二二七			
社会科学関係		二、四八四			
自然科学関係		七〇八			
専門図書					
国文科関係	一八、五一九				
経済科関係	三、三二一				
雑誌、報告、紀要	七六七		一〇、八五六 二、〇五五	七、六六三 一、二六六	一八、五一九 三、三二一 七六七

二、標本

種別	専用	共用	計	備考
仏像				
古鏡				
			二六	

三、機械器具

種別	専用	共用	計	備考
生物学用				
顕微鏡				
殺菌器				
恒温器				
天秤				
等				
	二七三	八五	三六〇	

#### 四、施設

本学は戦災によりまして校舎を始として、諸設備の大部分を焼失し、現在の校地中に残った建物を改造補修して、今日に及び漸く学校の機能を復活し始めたのであるから、何かと不自由ではあるが、今後校舎等の新営するには充分な校舎敷地を有している。機械器具においても同様、毎年補充する。

今回<sup>(短)</sup>単期大学の設立に当つて、専用校舎主として第一号館を教室に充てたが、勿論一時的のものであつて、短期大学専用校舎の新営を計画、建築届も既に提出しました。一方、大学のために教室の改造、図書館の整備、書庫の新営、研究室の新設、学長室、事務室の新設改造、学生控室、便所の新営等、必要な施設をなし、仮校舎として準備をしたので、一学級四十名を収容、教育するには先ず差支へない程度に不十分ながら用意した。

専用教室及び研究室の現状を挙げれば、講義室三、特別教室（生物学実験室兼講義室）、同準備室各一、演習室一、屋内体操場一、講堂一、研究室六、図書閲覧室一、書庫一、学生控室一、学長室一、講師室一、補導室一、事務室三、便所二等である。即ち一号館は教室で、研究室、学長室、事務室等は図書館内に設けてあり、先ず本学年は、国文科、経済科（夜間）各一学級四十名（定員）を以て開学発足するのであります。更に屋内体操場の一部を世田谷区福祉事務所に貸与してありますが、本年三月末日限り明渡すこと<sup>(に)</sup>なつてゐる（別紙承認書の通り）。



専用校舎新営について、旧国士館学園本館焼跡に建設の計画をたて、着々準備がす、められ、既に建築届を提出した。

この校舎の大様を述べると、木造瓦葺二階建、総延坪五百坪、講義室（合併教室）一、普通教室六、特別教室及び附属室四、研究室兼演習室四、教員室、学長室、会議室、応接室一、事務室、小使室等を含み、四月上旬着工、十月末竣工の予定である。

夜間授業を行ふため照明は充分考慮して設備し、屋外灯、投光灯等の設備あり。

ガスは生物学実験室に附設す。

水道の設備についても生物学教室に設けた。

防火用として校内に四ヶ所の貯水槽及井土<sup>(戸)</sup>三ヶあり。

# 施設等変更について

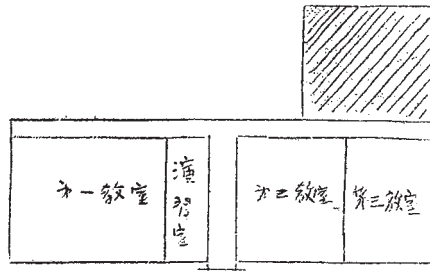
一、生物学の増設に伴ひ左の通り第一号の教室一部を生物学教室及準備室に改造す（図面添付）斜線の分

教室の坪数一〇坪五合

準備室 五坪二合五勺

附帯設備

水道、瓦期<sup>（斯）</sup>を附設する



二、学生控室の新設

学生の為の二十坪の学生控室を一号館と屋内体操場の中間に新設する。

図面添付（青写真）

三、短期大学校舎の新設

理事会の決議により短期大学校舎を、旧専門学校焼跡に木造二階建四百六拾坪を新設する（図面添付）。

一、建築認可願 二月一日頃提出する。

一、入 札 認可あり次第入札により工事施行者を定める。

一、起 工 四月三日

一、竣 工 十月末日限り

一、落成式 十一月三日

新築される校舎の室数及び室の坪数

1. 学 長 室 一室 九坪

2. 会 議 室 二室 八坪

四坪五合

3. 教 員 室 一室 一二坪

4. 教 室 七室 各二〇坪

5. ヌ 一室 一六坪

6. 合同教室 一室 三〇坪

7. 研究室兼演習室四室 各十二坪

8. 生物学教室 一室 二〇坪

9.	同 準備室	一室	八坪
10.	暗 室	一室	四坪
11.	標 本 室	一室	六坪
12.	応 接 室	一室	八坪
		一室	四坪五合
13.	事 務 室	一室	九坪五合

右の他、小使室、宿直室、物置、便所等設けられる。

# 一、図書館の完備

図書館の建物は一一九坪二五あり、之れ学長室、研究室六室、教員室一室、学生補導室、事務室を設けた。

定員昼夜合して初年は八十名に対し、最少限度閲覧室は三一坪五合、閲覧台六台二十四名の座席あるも尚予猶あり、更に十六名至自二十名は収容可能である。

書庫の落成、現在書籍の一部を格納す。

理事会の決議書写

学校法人至徳学園理事会決議書

昭和二十七年十二月五日后二時学校法人至徳学園事務所に於いて理事会を開催し、理事長柴田梵天議長となり、理事四名出席、左記事項決議す。

一、生物教室の新設並びに必要な実験資材の購入の件

一、学生控所新設の件

一、校舎新築の件

以上

昭和二十七年十二月五日

出席理事

中村宗雄<sup>印</sup>

樹下信雄<sup>印</sup>

眞野正順<sup>印</sup>

柴田梵天<sup>印</sup>

一、生物学用実験機械器具購入領収書、納品書添付

〔納品書〕〔領収書〕略〕

（字カスレにて判読不能、建築物明渡カ）

に關すること

国士館所有家屋を東京都世田谷福祉事務所に対し貸与中の処短期大学校舎（体育館及び教室として使用の為め昭和二十八年三月末日限り明渡方交渉中の処別紙の通り承諾す

⑤ 承諾書

国士館短期大学校舎として使用の為め左記建物を昭和二十八年三月末日限り明渡すことを承諾します。

記

一、世田谷区世田谷壺丁目千六番地所在

木造瓦葺平家建第二校舎壺棟

建坪貳百参拾五坪貳合五勺の

内現在使用分

昭和二十七年十月十四日

東京都世田谷福祉事務所長印

至徳学園理事長殿

第六 学科又は専攻部門別学科目

〔前掲「別表第二」に同じ〕

第七 履修方法及び学士号の附与

〔前掲「別表第一」に同じ〕

第八 学部及学科別学生定員

一、学部及び学科別毎学年入学定員

一、国文科 四〇名

二、経済科 四〇名

二、学部及び学科別総学生定員

一、国文科 八〇名

二、経済科 八〇名

三、専門科目別学生収容定員

	学科又は 専門部門
国文 経済 科	専門科目
八〇名	収容定員
	備考

第九 職員組織

一、職員総括表

学 教 助 助 講 事 図 事 医 書 雇 所 長 員 授 教 手 師 員 務 館 長 務 師 記 他									
					専任				
二 四 二 一 九 六 五 〇 一 一					第一年次				
					第二年次				
二 四 二 一 九 六 五 一 一 一					計				
					兼任				
					第一年次				
一 一 二					第二年次				
一 二 二 五					計				
					兼任				
二 一 三 八 一 三					第一年次				
六 一 七					第二年次				
二 一 三 四 六 〇					計				
					計				
一 四 六 一 七 三 七					第一年次				
七 一 二 〇					第二年次				
二 四 二 二 一 一 二 一 二 一 七 九 七					計				
					備考				



二、学部及び学科別定員

									学部		
体育	教職課程	経済科	国文科	中国語	英語	外国語	社会科学	一般教育	学科		
		五	四		一	一	一	一	専任	教授	
		一					一	一	兼任		
	一	二	一				一	一	二		兼任
	一	八	五		一	一	一	二	一		四
	一		一					三	三	専任	助教授
	一		一							兼任	
										兼任	
	二		二					三	三	計	
									専任	助手	
									兼任		
									兼任		
									計		
一		二	二				一	一	専任	講師	
	一								兼任		
一		六	三	一	一	二	一	三	兼任		
二	一	八	五	一	一	三	一	四	計		
二	四	一	六	二	一	一	二	一	計		
									備考		

一般教育

教 授	学 長	職 名
専任	専任	専任、 兼任、 の別
		本務の 名称並 びに担 当学科 目又は 講座
一般教育 法学 憲法 専門学		担任の学 科目又は 講座
大正十二 年三月 早稲田大 学法学部 英法科	大正四年 六月 早稲田大 学専門部 政治経済 科	最終卒業 学校学部 学科名並 びに卒業 年月日
		学位 称号
著書六 論文五		著書学術 論文の数
六・八		教 歴
〃	昭 二八・ 四	採用予 定年月
二、 〇〇〇	一七、 〇〇〇 円	月額基本給
東京	東京	国籍 本籍
男	男	性別
中村弥三次 明治二五・ 一〇・一五	柴田徳次郎 明治二三・ 一二・二〇	氏名 年月日生
昭二七・ 一二審査 通過	昭二七・ 一〇学長 として審 査通過	備 考

国士館短期大学

助教授	助教授	助教授
〃	〃	専任
一般教育 文 学 専門 文 学 国文学 演習 教職 国文科 教育法 教育実 習	一般教育 哲 学 早稲田大 学文学部 哲学科西 洋哲学科	一般教育 倫 理 政治科 昭和二八 年三月 同大学文 学部大学 院修了の 予定
昭和三年 三月 国学院大 学部国文 科	昭和一一 年三月 早稲田大 学文学部 哲学科西 洋哲学科	昭和八年 三月 日本大学 法文学部 政治科 昭和二八 年三月 同大学文 学部大学 院修了の 予定
著書四	著書四 論文三	論文二
四・三	三	
〃	〃	昭二八・ 四・
一一、 〇〇〇	一一、 〇〇〇	一一、 〇〇〇
東京	東京	広島
男	男	男
島田春雄 明治三九・ 三・二六	松浪信三郎 大正二・ 八・一八	佐藤嘉祐 明治三二・ 一〇・一五
昭二七・ 一〇助教 授として 審査通過	昭二七・ 一二助教 授として 審査通過	昭二七・ 一〇倫理 学助教授 として通 過

講 師	教 授	教 授	教 授
専任	〃	兼任	兼任
論動物生物学 茨城大	生物学 学習院大	倫理学 日本大	
一般教育 生物学	一般教育 生物学	一般教育 倫理学	専門 金融論 一般教育 経済学
物学科 部農業生 大学農学 海道帝国 年三月北 大正十三	学科学 大学植物 大学理科 東京帝国 七月 大正六年	部史学科 大学文学 東京帝国 七月 大正八年	科大学院 大学理財 慶應義塾 三月 大正九年
	博士 理学	博士 文学	
著書なし 論文一	著書六 論文三 外七〇	著書五 論文四	著書一 論文四
七・四	八・三三	三	四・八二
〃	〃	〃	昭二八・ 四・二八
一一、 〇〇〇	三、 〇〇〇	三、 〇〇〇	一五、 〇〇〇
愛媛	東京	埼玉	東京
男	男	男	男
四・七 明治三二・ 松木豊雄	一〇・二八 明治二五・ 江本義数	五・一四 明治一八・ 佐々木英夫	四・九 明治二八・ 竹村豊太郎
審査通過 師として 科大学講 霞ヶ浦農	審査通過 学教授と して審査 通過	審査通過 教授とし て審査通 過	審査通過 一〇教授 として審 査通過

「〔教員個人調（履歴書）〕等略」

講 師	講 師	講 師
〃	〃	兼任
中央大 学助教 授数学		日本大 学教授 統計学
一般教育 数学	一般教育 歴史	一般教育 統計学
昭和一八 年九月 東京帝国 大学工学 部土木学 科	大正七年 七月 東京帝国 大学文科 大学史学 科	大正五年 七月 東京帝国 大学理科 大学数学 科統計専 攻
著書七	著書四 論文三	著書九 論文八
八・九	三	七・五一
〃	〃	昭二八・ 四・
三、 〇〇〇	三、 〇〇〇	三、 〇〇〇
東京	東京	岡山
男	男	男
春日屋伸昌 大正九・ 一・五	岩井大慧 明治二四・ 一〇・一五	森數樹 明治二五・ 一〇・一五
昭和二四 ・中央大 学助教 として審 査通過	昭和二七 ・一二講 師として 審査通過	昭二四・ 日本大学 教授とし て審査通 過

外国語

職名	教授	講師
専任、兼任、 の別	専任	兼任
本務の 名称並 びに担 当学科 目又は 講座	至徳専 門学校 教授 英語	
担当学科 目又は講 座	英語	中国語 専門漢文 学
最終卒業 学校学部 学科名並 びに卒業 年月日	大正六年 七月 東京帝国 大学英文 科大学英 文専攻	昭和二十四 年三月 東京文理 科大学文 学科漢文 専攻
学位 称号		
著書学術 論文の数	著書二	著書四 論文五
教 歴	二 六 八	
採用 予定 年月	二八、 四	〃
月額基本給	一、〇〇〇	三、〇〇〇
国籍 本籍	東京	茨城
性別	男	男
氏名 年月日生	根本剛 明治二六、 二・一〇	飯田吉郎 大正一一、 三・二一
備 考	昭二七・ 一〇教授 として審 査通過	昭二七・ 一〇講師 として審 査通過

「教員個人調（履歴書）」等略

教 授	教 授	教 授	職 名	国文科
			専任、 兼任、 兼任、 の別	
国文学 講師 子大学 日本女		東洋大 学教授 漢文学	本務の 名称並 びに担 当学科 目又は 講座	
国文学	漢文学	漢文学	担当学 科又は 講座	
大正五年 七月 東京帝国 大学文科 科大学文 科	大正九年 六月 東京帝国 大学文科 大学支那 文学科選 科	大正六年 十月 東京帝国 大学文科 大学支那 文学科	最終卒業 学校学部 学科名並 びに卒業 年月	
		文学 博士	学位 称号	
著書一	著書二 論文三	著書二 論文六	著書学術 論文の数	
七・八三	八・六二	八・七二	歴教	
〃	〃	二八・ 四	採用 予定 年月	
一一、 〇〇〇	一一、 〇〇〇	一五、 〇〇〇	月額基本給	
東京	東京	山梨	国籍 本籍	
男	男	男	性別	
石川佐久太 郎 明治二一・ 七・三〇	野村岳陽 明治一八・ 一一・一八	竹田復 明治二四・ 一・一〇	氏名 年月日生	
昭二七・ 教授とし て審査通 過	昭和二 七・一〇 教授とし て審査通 過	昭二四・ 東京教育 大学教授 として審 査通過	備考	

助教授	講師	講師	助教授	教授
兼任	専任	〃	〃	専任
		漢学 日本大 文学 講師		
国文学	文学概論 文芸思潮	漢文学	国文学	国文学
前学	昭和三 部独文 部文学	昭和二 年三月 日本大 学文学 部文学 部漢文 学専攻	昭和二 年三月 東京帝 国文学 部文学	昭和三 部独文 部文学
	著書五 外多数	論文三	著書二 論文四	著書一 論文一〇
掲	〇・三一	七・三		六・一一
	〃	〃	〃	四二八・
	一一、 〇〇〇	一一、 〇〇〇	一一、 〇〇〇	一二、 〇〇〇
	東京	千葉	愛知	栃木
	男	男	男	男
島田春雄	芳賀檀 明治三七・ 七・六	大森悟 大正一二・ 一・二六	秋山虔 大正一一・ 一・一三	亀田純一郎 明治三七・ 一〇・二七
	昭和二 七・一二 講師とし て審査通 過	昭二七・ 一〇講師 として審 査通過	昭二七・ 一〇助教 として審 査通過	昭二七・ 一二教授 として審 査通過



〔教員個人調（履歴書）等略〕

講 師	講 師	講 師	講 師	教 授
兼任	兼任	兼任	兼任	兼任
言語学 講師 女子大学 日本女	国文学 学教授 東洋大		国文学 教授 東京教 育大学	国文学 教授 東京教 育大学
言語学	国文学	漢文学	国文学	国文学
科部 大学文学 東京帝国 大学文学 昭和十八 年九月	科部 大学文学 東京帝国 大学文学 昭和四年 三月	専攻 学部漢文 東京文理 科大学文 昭和二十 一年九月	部文学 京都市 昭和二年 三月	科部 大学文学 東京帝国 大学文学 昭和三年 三月
論文三 著書四	論文三 著書三	論文三 著書一	論文二〇 著書四	論文五 著書四
五・五	七・六一		二・六一	六・八二
〃	四二八・	四二九・	〃	四二八・
三、 〇〇〇	三、 〇〇〇	三、 〇〇〇	三、 〇〇〇	三、 〇〇〇
東京	東京	道北海	埼玉	新潟
男	男	男	男	男
三・七 大正九・	二・二五 明治三九・	二・一一 大正七・	一・一三 明治三二・	一一・二五 明治二七・
	審査通過 授として 期大学教 板女子短 昭和五戸	審査通過 師として 漢文学講 昭二七・	査通過 として審 東京教育 昭二四・	査通過 として審 東京教育 昭二四・

教授	教授	教授	教授	職名	経済科
専任	専任	専任	専任	兼任、専任、 の別	
	千葉商 科大学 講師 交通論 経営学			本務の 名称並 びに担 当学科 目又は 講座	
経済事情	交通論 経営学	経済学 金融論	簿記及会 計	担任学科 又は講座	
七月 東京帝国 大学法学 部政治 学科	明治四一 年七月 ペンシル ヴェニア 大学経済 院	前	三月 コンロン ビア大学 大学院経済 科	最終卒業 学校学部 学科名並 びに卒業 年月	
商学 博士	商学 博士			学位 称号	
著書五 論文二	著書三 論文二		著書一 テキスト 多数 論文一	著書論文 の数	
七・三二	六・四三	掲	二・四	教 歴	
〃	〃	〃	二八・ 四	採用 予定 年月	
一二、 〇〇〇	一二、 〇〇〇		一二、 〇〇〇	月額基本給	
広島	東京		東京	国籍 本籍	
男	男		男	性別	
田中貢 明治二四・ 一〇・二一	伊藤重治郎 明治一一・ 一・九	竹村豊太郎	松野喜内 明治二二・ 九・一五	氏名 年月日生	
昭和二 七・一二 経済事情 教授審査 通過	昭和二 七・一二 交通論経 営学教授 審査通過		昭二七・ 一〇簿記 教授 同二二 會計教授 審査通過	備考	

国士館短期大学
---------

教 授	教 授	講 師	教 授
兼任	兼任	専任	専任
法学 授 早稲田 大学教	経済学 日本大 学教授	法実習 策、各 経済政 策、各 期大学 講師	
法学	経済史	経済政策 社会科学 育法実習	世界経済
独法科 学法学部 早稲田大 七月 大正六年	学部 京都市 大学 経済学 部	昭和十八 年九月 中央大 学 経済学 部	大正一五 年七月 ハ バード 院 大学 経済学 部
博士 法学	博士 経済学		マスター オブ ツ マスター オブ オビ ネス アド ミスト レ イ シ ョ ン
著書五 論文多 数	著書四 論文二	著書なし 論文二〇	著書三 論文四
一・六一	一・三一	九・二	・一一
四二九・	〃	〃	四二八・
五、 〇〇〇	五、 〇〇〇	一一、 〇〇〇	一二、 〇〇〇
東京	千葉	東京	大阪
男	男	男	男
八・九 明治二七・ 中村宗雄	九・一一 明治二五・ 岩田耕作	九・九 大正元・ 小川福次郎	一二・二 明治三四・ 清水博
査通過 学教授審 田大学法	査通過 史教授審 大学経済	格 師審査合 師審査合 経済政策 教育法講	審査通過 教授とし 世界経済
昭和二 四・早稲 田大学法	昭和二 四・日本 大学経済	昭和二 七・一二 七・一二 七・一二	昭和二 七・一二 七・一二 七・一二

講 師 兼 任	講 師 兼 任	講 師 兼 任	講 師 兼 任	講 師 兼 任
策 商 学 日 交 業 教 本 通 政 授 大 論 論 学 学	經 学 日 学 教 本 学 授 大	策 社 論 授 大 会 政 論 經 政 政 原 学	保 授 大 早 險 論 学 稲 論 教 田	
商 業 学	商 業 英 語	經 済 原 論	保 險 論	財 政 学
学 部 大 学 東 京 帝 国 大 学 經 済	大 正 七 年 七 月 東 京 帝 国 大 学 經 済	一 九 二 一 年 六 月 コ ロ ン ビ ア 大 学 經 済 学 部	大 正 四 年 七 月 早 稲 田 大 学 商 学 部	明 治 四 五 年 七 月 早 稲 田 大 学 政 治 經 済 学 部
博 士 經 済 学	博 士 經 済 学	博 士 商 学	博 士 商 学	博 士 經 済 学
論 著 文 書 多 数 四	論 著 文 書 三 三	論 著 文 書 二 一	外 論 著 多 文 書 数 二 三	論 著 文 書 一 一
・ ○ 三	・ 三	七 ・ 七 三	八 ・ 七 二	・ 三
〃	四 二 八 ・	〃	〃	四 二 九 ・
三、 〇〇〇	三、 〇〇〇	三、 〇〇〇	三、 〇〇〇	三、 〇〇〇
東 京	川 神 奈	東 京	東 京	徳 島
男	男	男	男	男
一 ・ 二 七 明 治 二 九 松 葉 栄 重	五 ・ 四 明 治 二 二 大 館 堯 寿	二 ・ 二 一 北 澤 新 次 郎 明 治 二 二	九 ・ 四 明 治 二 七 末 高 信	八 ・ 二 八 阿 部 賢 一 明 治 二 三
審 査 通 過 政 策 教 授	昭 和 二 四 ・ 日 本 大 学 經 済 学 教 授 審 査 通 過	昭 和 二 四 ・ 早 稲 田 大 学 教 授 審 査 通 過	昭 和 二 四 ・ 早 稲 田 大 学 保 險 論 教 授 審 査 通 過	昭 和 二 七 ・ 一 〇 財 政 学 講 師 審 査 通 過

「教員個人調（履歴書）」等略

講 師	講 師
専任	兼任
	策 経 学 日 済 政 本 授 大
英 読 外 会 話 書 講	経 済 政 策
学部 ン 大 学 法 学 部	一九二一年七月 ワシントン
	博 士 経 済 学
	・ 三
四 二 八 ・	〃
一 一、 〇 〇 〇	三、 〇 〇 〇
国 合 北 衆 衆 米	東 京
男	男
三 一 土 ・ 八 井 二 九 喜 九 八 代 ・ 一	加 藤 一 雄
	通 過 講 師 審 査 昭 和 七 ・ 一 〇 二

「教員個人調（履歷書）」等略

		講師	助教授	助教授	職名
		兼任 兼担	兼任 兼担	専任	兼任、 専任、 の別
		前	前		本務の 名称並 びに担 当学科 又は講 座
教育史 教育原理	教育学実習	教育学法 教育学実習	教育学心理 学	昭和七年三月 東京文理 科大学哲 学史科研 究科	担任学科 又は講座 学位 学校学部 学科名並 びに卒業 年月
大正六年七月 東京帝国 大学文科 大学哲学 科教育学 専攻	掲	掲			最終卒業
文学博士					学位 称号
著書四 論文一〇				著書四 論文二	著書論文 の数
三・〇六				六一・五	教歴
二八・ 四				二八・ 四	採用 予定 年月
三、〇〇〇				一一、〇〇〇	月額基本給
福岡				東京	国籍 本籍
男				男	性別
松月秀雄 明治二五・ 九・一八	小川福次郎	島田春雄		高階順治 明治三一・ 一〇・二三	氏名 年月日生
昭和二年四月 東京理科大学 教育学教授 審査通過				昭二七・ 一〇教育 心理学助 教授審査 通過	備考

教職課程

国士舘短期大学

〔教員個人調（履歴書）〕等略〕

講 師	講 師	職 名	体育
兼任	専任	の兼任専任、 別担任、	
	体育教授 門学校 至徳専	は学科又 は講座 び担任 名称及 本務の	
体育講義	体育 実技 理論	座目又は講 担当学科	
部 大学 医学	科 体操 師範 学校 専修	年 月 卒業	最終卒業 学校学部 学科名並 びに卒業
博士 医学		称 号	学位
論文二	著書三	の著書論文 数	
	七・三二	歴教	
々	四二八・	年 月	採用 予定
三、 〇〇〇	一〇、 〇〇〇	月 額	基本給
長野	山形	本 籍	国籍
男	男	性 別	
岡田竹文	會田彦一 明治二六・ 四・一	年 月 日生	氏名
通過 講師 審査 通過	昭二六・ 法政大学 体育講師 審査通過	備考	国士館短期大学

第十 <sup>(立)</sup>設置者に関する調

私立大学

一、役員氏名

顧問	徳富猪一郎
〃	小坂順造
〃	緒方竹虎
〃	松野鶴平
〃	野田俊作
理事	柴田徳次郎
〃	柴田梵天
〃	眞野正順
〃	中村宗雄
〃	樹下信雄
監事	佐伯唯一
〃	會田彦一

二、理事会又はその他の議決機関の決議録



昭和二十七年八月十六日午後二時学校法人至徳学園事務所に於て理事会を開催し理事五名出席全会一致を以て左記事項決議す。

一、学校法人至徳学園の名称を学校法人国士館と名称変更の件並びに認可申請の件

一、国士館短期大学創設並びに認可申請の件

一、昭和二十七年八月二十日学校法人至徳学園評議員会開催の件

一、柴田徳次郎氏より運動場寄附申込承諾の件

昭和二十七年八月十六日

学校法人 至徳学園

理事 中村宗雄

〃 柴田梵天

〃 岡本正徳

〃 眞野正順

〃 樹下信雄

学校法人至徳学園評議員会決議録

昭和二十七年八月二十日午後二時学校法人至徳学園事務所に於て評議員会を開催し評議員七名出席左記事項を決議す。

一、国士館短期大学創設並びに認可申請の件

一、学校法人至徳学園の名称を学校法人国士館と名称変更の件並びに認可申請の件  
一、至徳学園理事岡本正徳氏辞任に伴ひ後任として柴田徳次郎氏を理事に選任の件

昭和二十七年八月二十日

学校法人 至徳学園

評議員 中村宗雄

柴田梵天

岡本正徳

眞野正順

樹下信雄

佐伯唯一

會田彦一

三、前年度の決算及び本年度の予算

二十六年年度決算

二十七年年度予算

(表紙)

「昭和二十六年年度

収支決算表 (昭和廿七年三月末日現在)

学校法人 至徳学園会計課

「

昭和二十六年年度収支決算総括表

至徳学園

収 入

円

支 出

円

学校法人	四一三、一九五・六五	学校法人	三七〇、九二一・六五
繰越金	二一、〇五一・六五	専門学校	三三二、六八四・〇〇
貸地貸家料	一一三、六八〇・〇〇	高等学校	四一五、〇一一・〇〇
専門学より繰入	一一四、九一六・〇〇	普通科	二八八、五四八・〇〇
高等学校商業科繰入	七七、四八二・〇〇	商業科	一一五、八五九・〇〇
その他	八六、〇六六・〇〇		
専門学校	四四七、五〇〇・〇〇		
高等学校	二九六、二九八・〇〇		
普通科	三六六、〇三〇・〇〇		
商業科			

受 入 雑 当  
験 業 雑 期  
料 料 入 不  
金 入 足  
料 料 金

計

受 入 雑  
験 業 雑  
料 料 入  
金 入 金

計

中  
学  
校

収

収

入  
一〇九、六四九・〇〇  
五、二四〇・〇〇  
九〇〇・〇〇  
円  
給 教 雑  
料 材 費  
費 費 料

中学校之部

四四七、五〇〇・〇〇  
円

計

当期 雑 什 広 印 教 消 通 交 給  
剩 業 器 告 刷 材 耗 信 通 料  
余 費 備 費 費 費 費 品 費 費 費  
金 費 品 費 費 費 費 費 費 費 料

入

二一、〇〇〇・〇〇  
二四、〇〇〇・〇〇  
三九二、九〇〇・〇〇  
九、六〇〇・〇〇  
円

専門学校之部

一、五二三、〇二三・六五  
六、二一〇・〇〇  
円

計

支

支

出  
一、四三〇・〇〇  
一、一二九・〇〇  
三〇〇・〇〇  
円

四四七、五〇〇・〇〇  
円

一、四一六・〇〇  
一、二七五・〇〇  
一、〇六〇・〇〇  
一、〇九〇・〇〇  
五、六九〇・〇〇  
三、一五〇・〇〇  
三、五五一・〇〇  
二〇、六一六・〇〇  
二、四四二・〇〇  
二七八、〇〇〇・〇〇  
円

出

一、五二三、〇二三・六五  
円

計												計	
	前期繰越金	寄附金	貸地賃料	貸家敷金	雑収入	設備充実費	寮室料	専門学校より受入	高等学校より受入				
	二一、〇五一・六五	二二、五〇〇・〇〇	一二三、六八〇・〇〇	一〇、八九〇・〇〇	二三、九九六・〇〇	二五、三〇〇・〇〇	三、五〇〇・〇〇	一一四、八一六・〇〇	七七、四八二・〇〇	収入		一二五、八五九・〇〇	
四一三、一九五・六五	円											円	
計												計	
	給料	交通費	消耗品費	修繕費	点灯費	保険料	什器備品費	寮費	雑費	高等学校不足金	(同校へ支出)		中学校不足金
	七五、〇〇〇・〇〇	四八六・〇〇	一九〇・〇〇	一四、五八五・〇〇	九、二八〇・〇〇	六四〇・〇〇	二、〇七〇・〇〇	八三三・〇〇	四三、九九九・〇〇	一一八、七一三・〇〇	一〇九、六四九・〇〇	三七、七五〇・〇〇	四一三、一九五・六五
	円											円	
至徳学園													

(表紙)  
「昭和二十七年」

収支予算表(經常費)

昭和二十七年収支予算総括

至徳学園

収 入		支 出	
学校法人	五六二、〇〇〇・〇〇	学校法人	五六二、〇〇〇・〇〇
専門学校	八一〇、〇〇〇・〇〇	専門学校	八一〇、〇〇〇・〇〇
高等学校普通科	九三三、〇〇〇・〇〇	高等学校普通科	九三三、〇〇〇・〇〇
同商業科	七九一、〇〇〇・〇〇	同商業科	七九一、〇〇〇・〇〇
中学校	四三二、〇〇〇・〇〇	中学校	四三二、〇〇〇・〇〇
計	三、五一九、〇〇〇・〇〇	計	三、五一九、〇〇〇・〇〇
維持員会特別会計		維持員会特別会計	
維持員会寄附	一二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	維持員会特別会計	
(二〇一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇)	七、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	短期大学創設臨時費	一二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
(二〇一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇)	五、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	書庫建設其の他	一二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
(内訳別紙の通り)			
計	一二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	計	一二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇

雑 授 入 受

雑 授 入 受

収 業 学 験

収 業 学 験

入 料 金 料

入 料 金 料

収

収

入  
九  
一〇一  
〇、〇五、八、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・ 円  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇

入  
八  
一〇、  
〇  
〇  
〇  
〇・ 円  
〇

入  
七  
二〇五四  
〇、〇、〇、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・ 円  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇

普通科  
高等学校之部

専門  
学校之部

体 教 図 給  
育 育 書  
費 費 費 料

計  
雑 修 什 消 広 印 通 文 体 研 教 図 給  
器 耗 告 刷 信 通 育 究 材 書  
繕 備 品 品  
費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 料

支

支

出  
一三五五  
五、五〇、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・ 円  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇

出  
八  
一〇、  
〇  
〇  
〇  
・ 円  
〇  
三三五  
〇、〇、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・ 円  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
二二二二  
〇、〇、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・  
二四六  
〇、〇、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・  
一二二  
〇、〇、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・  
一四  
〇、〇、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・  
一四  
〇、〇、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・・・ 円  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇

雑 授 入 受

収 業 学 験

入 料 金 料

計

収

入

九  
三  
三、

〇  
〇  
〇  
〇  
・  
〇  
〇

円

同  
商  
業  
科

七  
六  
一  
五、八、二、六、  
〇  
〇  
〇  
〇  
・  
〇  
〇  
〇  
〇  
・  
〇  
〇  
〇  
〇  
円

雑 点 修 什 消 広 印 通 交 体 教 図 給  
灯 繕 器 耗 告 刷 信 通 育 材 書  
品 品 品 品 品 品 品 品 品 品 品 品  
費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 料

什 雑 修 消 広 印 通 交  
器 繕 器 耗 告 刷 信 通  
備 品 品 品 品 品 品 品 品  
費 費 費 費 費 費 費 費

計

支

出

九  
三  
三、

〇  
〇  
〇  
〇  
・  
〇  
〇  
〇

円

一  
三 五 〇 一 二 一 一 一 五 三 四  
〇 五 〇 五 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
・ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
円

二 一 二 一 一 一 一  
五 六 五 四 〇 〇 二 二  
〇 五 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
・ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇



雑土寄  
地建附  
収物使  
入料用  
金料

計

雑授入受  
収業学験  
入料金料

計

収

収

入  
四一〇〇  
二二〇〇  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・円  
〇〇〇〇

至徳学園

四三二、  
〇〇〇  
・円  
〇〇

通交給

信通

費費料

支

出  
三六六  
〇〇〇  
〇〇〇  
・・円  
〇〇〇  
〇〇〇

四三二、  
〇〇〇  
・円  
〇〇〇

雑修什消広印通交体教図給  
器耗告刷信通育材書  
繕備品  
費費費費費費費費費費

支

出

入  
四一〇五  
三四〇  
三、四、  
〇〇〇〇  
〇〇〇〇  
・・円  
〇〇〇〇

中学校之部

七九一、  
〇〇〇  
・円  
〇〇

計

[illegible]

計	一〇、馬 五頭	五〇〇、〇〇〇・〇〇
	一一、馬房（二〇坪）	二〇〇、〇〇〇・〇〇
	一二、電気工事	四〇〇、〇〇〇・〇〇
	一三、水道工事	一五〇、〇〇〇・〇〇
計	一四、追加施設補修工事	一、七八八、〇〇〇・〇〇
		円
計		一一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇

学校法人国士館寄附行為

第一章 総則

名称

第一条 この法人は学校法人国士館と称する。

事務所の所在地

第二条 この法人は事務所を東京都世田谷区世田谷壹丁目千六番地に置く。

第二章 目的及び設置する学校

目的

第三条 この法人は教育基本法及び学校教育法に従い聖人至徳を志し、不断の読書、体験、反省により、

誠意、勤労、見識、気魄を涵養し、以て道義日本を建設し、世界の平和と進運とに貢献する有為の人材を養成する教育を行うことを目的とする。

#### 設置する学校

第四条 この法人が前条に規定する目的を達成する為に設置する学校は、左に掲げるものとする。

- (一) 国士館短期大学
- (二) 国士館高等学校
- (三) 国士館中学校

#### 第三章 役員

#### 役員

第五条 この法人の役員の定数は左の通りとする。

- (一) 理事 五名
- (二) 監事 二名

#### 理事長

第六条 理事のうち一人は理事の互選により理事長となる。

- (2) 理事長は、理事の三分の一以上から会議に付議すべき事項を示して理事会の招集を請求された場合には、その請求のあつた日から七日以内に、これを招集しなければならない。

- (3) 理事会は、理事の過半数の出席がなければ、その議事を開き、議決することができない。但し、当該議事につき書面をもつてあらかじめ意志を表示した者は、出席者とみなす。

#### 理事長の職務の代理及び代行

#### 第七条

理事長に事故があるとき又は理事長が欠けたときは、理事長のあらかじめ指名した他の理事が順次理事長の職務を代理し、又は理事長の職務を行う。

#### 理事の選任

#### 第八条

校長で理事となる者は国士館短期大学長、国士館高等学校長及び国士館中学校長のうちその互選によつて定められた一名とする。

- (2) 評議員のうちから選任される理事は一名又は二名とし、評議員の互選で定める。
- (3) 前二項の規定により選任された理事以外の理事は、同項の規定により選任された理事の過半数の議決をもつて選任する。

#### 監事の選任

#### 第九条

監事は評議員会の意見を聞いて理事会において選任する。

#### 役員の任期

#### 第十条

役員（第八条第一項の規定により理事となる者を除く、この条中以下同じ）の任期は四年とする。

但し欠員が生じた場合の補欠役員の任期は前任者の残任期間とする。

(2) 役員は再任されることができる。

(3) 役員はその任期満了の後でも後任者が選任されるまではなおその職務を行う。

## 理事会

第十一条 この法人の業務の決定は理事会によつて行う。

(2) 理事会は理事を以て組織する。

(3) 理事会は随時理事長が招集する。

(4) 理事会の議長は理事長とする。

第十二条 理事会の議事は法令及びこの寄附行為に特別の規定のある場合を除く外、理事の過半数で決し、

可否同数の時は議長の決定するところによる。

## 評議員会

第十三条 評議員会は左に掲げる十一名以上十三名以内の評議員を以て組織する。

(一) この法人の職員（この法人の設置する私立学校の教員その他の職員を含む）のうちから選任されたる者一名。

(二) この法人の設置する学校を卒業した者で、年令二十五年以上のものうちから選任される者

一名。

(三) 理事のうちから選任される者三名以上五名以内。

(四) 国士館短期大学長、国士館高等学校長及び国士館中学校長のうちからその互選によつて定められた者一名。

(五) この法人に関係ある功労者のうちから選任されたる者三名以上五名以内。

## 議長

第十四条 評議員会の議長は評議員の互選で定める。

第十五条 左に掲げる事項については理事長においてあらかじめ評議委員会の意見を聞かなければならな

い。

(一) 予算、借入金（当該会計年度内の収入をもつて償還する一時の借入金を除く）基本財産及び運用財産中の不動産及び積立金の処分並びに不動産の買受に関する事項。

(二) 予算外の新たな義務の負担又は権利の放棄に関する事項。

(三) 合併。

(四) 私立学校法第五十条第一項第一号及び第三号に掲げる事由による解散。

(五) 残余財産の処分に関する事項。

- (六) 運用財産中不動産及び積立金の管理に関する事項。
- (七) 寄附金の募集に関する事項。
- (八) 剰余金の処分に関する事項。
- (九) 寄附行為の施行規則に関する事項。
- (十) その他、この法人の業務に関する重要事項。

評議員の選任

第十六条 第十三条第一号第二号及び第五号に規定する評議員は理事会において選任する。

- (2) 第十三条第三号に規定する評議員は理事の互選で定める。

- (3) 第十三条第五号に規定する評議員は前二項及び第十三条第四号の規定により選任された評議員の過半数の議決を以て選任する。

- (4) 第十三条第一号第三号及び第四号に規定する評議員は理事、校長又は職員の地位を退いたときは評議員の職を失うものとする。

任期

第十七条 評議員（第十三条第四号に規定する者及び前条第二項の規定により選任された者を除く、この条中以下同じ）の任期は三年とする。但し欠員が生じた場合の補欠の評議員の任期は前任者の残



任期間とする。

(2) 評議員は再任されることが出来る。

(3) 評議員はその任期満了後でも後任者が選任されるまではなおその職務を行う。

## 顧問

第十八条 この法人に顧問若干名を置くことができる。

第十九条 顧問は理事会又は評議員会において必要と認める重要事項の諮問に応ずるものとする。

第二十条 顧問はこの法人に特に功労ある知名の士を理事会において推挙する。

## 第四章 資産及び会計

第二十一条 この法人の資産は左の通りとする。

(一) この法人組織変更当初財団法人至徳学園より承継した別紙財産目録記載の財産。

(二) 授業料、入学金及び受験料。

(三) 資産から生ずる果実。

(四) 寄附金品。

(五) その他の収入。

## 財産の区分

第二十二條 この法人の資産はこれを分つて基本財産及び運用財産の二種とする。

(2) 基本財産及び運用財産の区分は私立学校法施行規則第三条第二項の規定に基き別紙財産目録の区分に従うものとする。

(3) 寄附金品については寄附者の指定がある場合にはその指定に従つて基本財産又は運用財産に編入する。

#### 財産の処分の制限

第二十三條 基本財産並びに運用財産中の不動産及び積立金はこれを処分してはならない。但し、この法人の事業の遂行上止むを得ない事由があるときはその一部に限りこれを処分することができる。

#### 運用財産たる積立金の運用

第二十四條 運用財産のうち積立金は確実な有価証券を購入するか、確実な信託銀行に信託するか、又は郵便貯金若しくは定期預金とするかして理事長が保管する。

#### 経費の支弁

第二十五條 この法人の事業の遂行に要する経費は運用財産中不動産及び積立金から生ずる果実、授業料、入学金、受験料その他の運用財産（不動産及び積立金を除く）を以て支弁する。

#### 予算

第二十六条 この法人の予算は經常部と臨時部に分つ。

## 決算

第二十七条 この法人の決算は毎会計年度終了後二月以内に作成し、これにつき監事の意見を求めるものとする。

(2) 決算において剰余金があるときはその一部又は全部を運用財産中積立金に編入し又は次会計年度に繰り越すものとする。

(3) 理事長において決算を評議員会に報告する場合には、監事の意見を添えなければならない。

## 財産目録、貸借対照表等

第二十八条 この法人の財産目録、貸借対照表、収支計算書及び事業報告書は毎会計年度二月以内に作成し、これらについて監事の意見を求めるものとする。

## 第五章 解散

### 残余財産の帰属者

第二十九条 この法人が解散（合併及び破産による解散を除く）した場合における残余財産の帰属すべき者は解散の時ににおいて他の学校法人その他教育の事業を行なう者のうちから理事会において選定する。

## 第六章 寄附行為の変更

第三十条 この寄附行為を変更しようとするときは理事の三分の二以上の議決及び評議員会の議決がなければならぬ。

## 第七章 公告の方法その他

### 公告の方法

第三十一条 この法人の公告は事務所所在地の国士館掲示場に掲示して行う。

### 施行規則

第三十二条 この寄附行為施行についての細目は理事会において定める。

### 附則

(1) この法人組織変更当初の役員は当分の間次の通りとする。

理事 柴田徳次郎

理事 柴田梵天

理事 眞野正順

理事 樹下信雄

理事 中村宗雄

監事 佐伯唯一

監事 會田彦一

(2) 組織変更後のこの寄附行為による役員を選任は、すみやかに行わなければならない。

(3) 第一項の役員は、組織変更後この寄附行為の規定により役員が選任された場合にはその職を失うものとする。

(4) この法人は第四条に規定するもの、ほか、当分の間、学校教育法第九十八条の規定により存続する至徳専門学校を設置する。

## 第十一 資産

### 一、資産総括

#### 基本財産

円

一、校 地

二、八六七坪

一四、三三五、〇〇〇、〇〇

二、校 舎

九八九、四七

四二、五四九、七五〇、〇〇

三、図 書

三三、六三〇冊

一六、八一五、〇〇〇、〇〇

四、機械器具

九六七、八一五、〇〇

		五、標本	二六六
		六、備品（校具、教具）	
		七、動物	二頭
		計	
		二、運用財産	
		一、現金	
		二、銀行預金残高	
		計	
		三、借入財産	
		一、校舎敷地	六、〇八八坪三五
		二、運動場	三、一三三坪
		計	九、二二一坪
		三、	文部省
		四、	東京都
		計	
		一、	二二〇、〇〇〇、〇〇〇
		二、	七〇四、〇〇〇、〇〇〇
		三、	一、四八四、〇〇〇、〇〇〇
		四、	一、二二〇、〇〇〇、〇〇〇
		五、	一、七三四、五一〇、〇〇〇
		六、	二〇〇、〇八〇、〇〇〇
		七、	七六、六八七、〇六五、〇〇〇
		八、	一、二三二、〇〇〇、〇〇〇
		九、	一、五三二、〇〇〇、〇〇〇
		一〇、	二四、三五三、四〇〇、〇〇〇
		一一、	三六、八八五、四〇〇、〇〇〇
		一二、	一、四八四、〇〇〇、〇〇〇
		一三、	一、二二〇、〇〇〇、〇〇〇
		一四、	一、七〇四、〇〇〇、〇〇〇

## 二、資産内訳

総計

二一七、二一一、二三五、〇〇〇

[illegible]

守衛控室	圖書	一般教育用	專門和洋書	機械器具	理科用機械外	顯微鏡	運動器具	樂器	標本	歛喜仏外	漢鏡日々鏡	海獸葡萄鏡	景教十字架	ラマ教典	解剖図	備品(器具)	金庫	電話	時計	時計	鉄製口ツカ	木製書棚	机	
所有																								
一・八〇	九八九・四三	三三、六三〇冊			四三三點	二四〇	一揃			六點	四點	一點	二	一	三		二個		二	二	一	一	一五	二四
五四、〇〇〇	四二、五四九・七五〇	一六、八一五・〇〇〇	一六、八一五・〇〇〇		一九七・八一五・〇〇〇	一五〇・〇〇〇	一二〇・〇〇〇	九六七・八一五・〇〇〇		五六〇・〇〇〇	一四〇・〇〇〇	二	五	一〇	五		一四五・〇〇〇		三	三	五	五〇	五七・〇〇〇	



総計																																																				
借入計		借入計		借入計		銀行預金		現金及預金		動物計		馬計		図書用カウンタ		閲覧用機		衝立		紅白旗		国旗		教壇		黒板		黒板		全椅子		学生用機		椅子																		
計		入		入		預金		残金		計		具		ス		機		立		旗		旗		壇		大		小		子		機		子																		
																					〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		〃		所有	
																					二頭		二組		二個		二個		九個		二個		一式		一組		一〇〃		一二〃		一八〃		一六〃		一八〃		三四個		三四個			
一一七、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、		一、																		
二一七、		七〇、		二二〇、		四八四、		九三四、		七三四、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、		二〇〇、																		
一一一、		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇																				
一三五〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇		〇〇〇〇																				
東京文部省																																																				

〔土地台帳謄本写、登記簿抄本写、預金現在高証明書写、残高証明書写、略〕  
 二、資の内訳表中機械器具の中へ左の通り加う。

	顕微鏡	鑑入	五台	金額	六〇、〇〇〇・〇〇
	解剖顕微鏡	〃	二〃		一二、〇〇〇円〇〇
	蒸気殺菌器		一〃		五、五〇〇円〇〇
	乾熱滅菌器		一〃		六、五〇〇円〇〇
	解剖器		三組		五、四〇〇円〇〇
	恒温器		一ヶ		八、五〇〇円〇〇
	上皿天秤		三台		六、六〇〇円〇〇
	天秤		一台		三、八〇〇円〇〇
	プレート入 <sup>(ハ)</sup>		三ヶ		六〇〇円〇〇
	解剖皿		三枚		八四〇円〇〇
	試験管		一五ヶ		六〇〇円〇〇
	フラスコ		一五〃		九〇〇円〇〇

円

メートルガラス	一五ヶ	二、五〇〇円〇〇
三角フラスコ	一五ヶ	九〇〇円〇〇
試験管立	五ヶ	八二五円〇〇
アルコールランプ	五ヶ	二五〇円〇〇
三却 <sup>脚</sup> 台	五ヶ	一七五円〇〇
アスベスト網	五ヶ	一〇〇円〇〇
試験管挟	五ヶ	一七五円〇〇
デッキグラス	五〇枚	四五〇円〇〇
□□□□グラス	五〇〇枚	七五〇円〇〇
時計皿	五ヶ	四五〇円〇〇
蒸発皿	五ヶ	一、五〇〇円〇〇
試薬瓶	五ヶ	一、三五〇・〇〇
計		一一七、八一五・〇〇

借入財産中学校舎敷地六、〇〇八坪三五は貸主の勝国寺より買取方申入れがありましたので、理事会に計り買取りを決議して柴田徳次郎に買取方を一任す、決議書添付す

〔理事会決議書写、略〕

勝国寺より借入れ敷地買取り計画

勝国寺より借入れ土地六、〇八八坪三合五勺は、去る十月中勝国寺代理関口弁護士より買取方申入れあり、依って役員会議を開き

一、この地所は三十五年前、大正七年当時荏原郡世田谷村元宿時代約二千坪は畑地あり、約四千坪は荒野であつたのを国士館が開墾したものであるが、寺の立場も考えて、坪壱千円と見て、全六百万円でも買取ること。

二、これを五ヶ年賦とすること。

三、以上により買収交渉を柴田理事長に一任すること。

右の申合に従ひ買収の話を進めております。

昭和貳拾七年拾貳月貳日

理事長柴田徳次郎

第十二 維持経営の方法

(一) 維持の方法

本学の授業料、入学金、検定料、証明手数料の外、高等学校の収入、維持員会の寄附により維持する。尚、不足の場合は各理事が之を保証補填する。

(二) 維持員会の目的及び組織は別紙の通りである。

国士館再建趣意書

国士館の再建に当り同憂の各位に懇へたい。

国士館の創建以来茲に三十有五年、敗戦後の外国占領下、当局の勧告により一時「至徳学園」と改称したが、建学の趣旨は渝るところなく、占領の終了と共に再び国士館の旧称に復る事になった。けだし、国士とは、威武も屈する能はず、貧賤も移す能はざる本当の人間であつて、これを措いて教学育人の目標はあり得ないからである。

然らば、本当の人間とは何であるか。今の世においては何等特別の徳操ではない。常識である。平衡を得た人格である。狂人が走つても共に駆け出さない平常心の持主である。事は極めて平凡の様であるが、如何なる威武の下にも、如何なる誘惑の前にも能く平常心を失はず、判断を誤らないことは容易の如くにして決して容易でない。而してそれを能くすると否とは、殆ど繋つて常識を具足するか否かにあるのである。

イギリスに空前の総罷業が行はれ、そしてそれが腰砕けに終つた時、ボルドウイン首相は「これは英国民

の常識の勝利だ」と叫んだ。正にそれは政府権力の勝利でなく、国民常識の勝利だったのである。例をイギリスに求めるまでもなく、古来国を危くするものは平衡の喪はれた心であり、国の根幹が常識によつて固められるならば、動乱の中に立つても国は危くない。国士館の養成せんとするものは、この常識であり、如何なる誘惑の前にも平常心を喪はない人格である。

今日の教育について種々の批判を聞くなかに、最も大なる欠陥は、その教育の方針が国の常識と懸け離れて居ることである。学問の自由を叫ぶうちに教育の目的を忘れたところにある。役に立つ人を作る代りに役に立たない人を作りつゝ、あることである。国士館は深く日本の将来を考へ、国の常識に基いて役に立つ人間を作りたい、それが念願である。

国士館は創業三十五年、大方諸賢の庇護と叱正とによつて自ら特異の伝統を培ひ来つた。武道教育はその一であり、国士館の名は武道界において一の存在になつて居る。この武道教育は国士館の再出発と共にますその特長を生かして行きたい。けだし、文武は鳥の両翼、車の両輪、文なき武の想像され得ざる如く、武なき文をもつては徳性の完成を期し得ないからである。

若しそれ学風の揚ると否とは、学校当事者の発憤精進と共に、同憂諸賢の垂教に俟つところが甚だ多い。切に大方の御支援を仰ぐ。

出光佐三

石橋止二郎

鳩山一郎

緒方竹虎

太田茂実

太田清蔵

高嶋基江

田代茂樹

中野金次郎

鍋島態道

武者小路公共

野田俊作

山川良一

松野鶴平

福永年久

小坂順造

有田八郎

眞藤愼太郎

柴田徳次郎

(イロハ順)

## 国士館大学維持員会規約

### 第一章 名称及び事務所

第一条 本会は国士館大学維持員会と称し、事務所を東京都世田谷区世田谷一丁目千六番地国士館内に置く。

### 第二章 目的

第二条 本会は国士館大学の維持発展を図るを目的とする。

### 第三章 役員

第三条 本会に会長一名、幹事若干名を置く。

会長は本会を代表し、幹事は本会の事務を行う。

### 第四章 会員

第四条 本会の会員は創立以来の援助者、その後継者、及び当代の代表的事業学識、経験ある同憂の善士を



以て組織し、本大学の維持並に発展に必要な且つ充分なる援助を与ふるものとする。

## 第五章 会計

第五条 会員より拠出せられたる基金は之を確實なる銀行に預け置き、予算に従ひ、支出するものとする。

以上

### 国士館大学維持員会

会長

信越化学社長

会員

ブリツジストンタイヤ社長

毎日新聞社長

出光興産社長

商工会議所会頭

衆議院議員

元王子製紙社長

元鉄道大臣

元司法大臣

参議院議員

明治鋳業社長

日本トレーディング社長

衆議院議員

農林大臣

小坂順造

石橋正二郎

徳富猪一郎

出光佐三

藤山愛一郎

緒方竹虎

藤原銀次郎

松野鶴平

小原直

團伊能

松本幹一郎

太田茂実

鳩山一郎

廣川弘禪

参議院議員

興亜海運火災社長

衆議院議員

麻生鋳業社長

衆議院議員

経済団体連合会相談役

三井鋳山社長

参議院議員

東邦生命社長

東洋レヨン会長

元外務大臣

日立製作所社長

経済学博士

産業経済新聞顧問

幡磨造船会長

参議院議員

野田俊作

中野金次郎

久原房之助

麻生太賀吉

植村甲午郎

山川良一

太田清蔵

田代茂樹

有田八郎

倉田主税

阿部賢一

横尾龍

元大蔵大臣 日産化学社長 大日本水産会長 東興産社長 旭ビール社長 日本ビール社長 西日本新聞社長 間組社長 津上製作所社長 味ノ素社長 元王子製紙社長 住友鋳業社長 夕刊福日会長 貝島鋳業社長 木曾鋳業社長	洪澤敬三 末松鳳平 鍋島熊道 東友市 山本為三郎 柴田清 田中齊之 神部満之助 津上退助 鈴木三郎助 高島菊次郎 福永年久 森田久 貝島太市 木曾重義	室町海運社長 三井化学社長 太平洋漁業社長 三井農林社長 御木本眞珠社長 三菱鋳業社長 古河鋳業社長 日魯漁業社長 元独逸大使 国務大臣 自由党総務 平凡社々長 幹事 〃 〃	高島基江 石田健 中部謙吉 福井亘 御木本幸吉 高木作太 新海英一 眞藤愼太郎 武者小路公共 山崎猛 海原清平 下中弥三郎 眞藤愼太郎 太田茂實 柴田徳次郎
--	---	---	--

国士館短期大学維持員会等寄附調（二七、一二・末日現在）

昭和二十七年 度

国士館短期大学創設臨時費

金七百万円也	維持員会	四八名	七拾口
金五百万円也	別紙の通	但し一口拾万円也	
	本科校友会	百貳拾万円也	壹千貳百口

昭和二十八年

合計金貳千六百参拾参万五千円也

金壹千四百参拾参万五千円也

柴田徳次郎所有土地

貳千八百六拾七坪

時価坪五千円也

但し 一口壹千円也

専門学校々友会

百万円也

壹千口

高等拓殖学校々友会

八拾万円也

八百口

中学校々友会

百万円也

壹千口

商業学校々友会

百万円也

壹千口

經常費

金参百六拾万円也

維持員会

参拾六口

臨時費

金七百万円也

維持員会七拾口

金七百七拾七万五千円也

本科校友会

百七拾七万五千円也

壹千七百七拾五口

昭和二十九年

經常費

合計金壹千八百参拾七万五千円也

専門学校々友会

貳百万円也

貳千口

高等拓殖学校々友会

百五拾万円也

壹千五百口

商業学校々友会

百五拾万円也

壹千五百口

金貳百九拾万円也

維持員会貳拾九口

臨時費

金六百万円也

維持員会六拾口

金六百万円也

本科校友会

百五拾万円也

壹千五百口

専門学校々友会

百五拾万円也

壹千五百口

高等拓殖学校々友会

五拾万円也

五百口

中学校々友会

百五拾万円也

壹千五百口

商業学校々友会

百万円也

壹千口

合計金壹千四百九拾万円也

昭和三十年度

經常費

金五拾万円也

維持員会

五拾口

臨時費

金六百五拾万円也

維持員会

六拾五口

合計金七百万円也

国士館短期大学維持員会寄附者名簿（年額）

昭和二十七年十二月末日現在

ブリヂストン社長	石橋正二郎殿	三口	参拾万円也
麻生鋳業社長	麻生太賀吉殿	二口	貳拾万円也
出光興産社長	出光佐三殿	二口	貳拾万円也
幡磨造船会長	横尾龍殿	二口	貳拾万円也
東洋レーヨン会長	田代茂樹殿	一口	拾万円也
農林大臣	廣川弘禪殿	二口	貳拾万円也
興亜海上社長	中野金次郎殿	二口	貳拾万円也
三井鉱山社長	山川良一殿	一口	拾万円也
明治鋳業社長	松本健次郎殿	一口	拾万円也
大成建設社長	藤田武雄殿	二口	貳拾万円也

国士館顧問	緒方竹虎殿	二口	貳拾万円也
副総理			
西日本鉱業社長	野見山謙二殿	一口	拾万円也
北海汽船社長	島田勝之助殿	一口	拾万円也
国士館顧問			
参議院議員	野田俊作殿	二口	貳拾万円也
東邦生命社長	太田清蔵殿	二口	貳拾万円也
間組社長	神部満之助殿	二口	貳拾万円也
津上製作社長	津上退助殿	一口	拾万円也
平凡社社長	下中弥三郎殿	二口	貳拾万円也
服部会社長	服部正次殿	一口	拾万円也
日本トレディング社長	太田茂美殿	二口	貳拾万円也
飯野海運社長	俣野健輔殿	一口	拾万円也
東都冷蔵社長	眞藤慎太郎殿	二口	貳拾万円也
西田鉱業社長	西田隆男殿	二口	貳拾万円也
東興産社長	東友市殿	二口	貳拾万円也
信越化学顧問	小坂善太郎殿	二口	貳拾万円也
	ビール協会殿	二口	貳拾万円也
石炭聯合会長	武内礼藏殿	二口	貳拾万円也
国士館顧問	松野鶴平殿	二口	貳拾万円也
参議院議院			
国士館顧問	小坂順造殿	三口	参拾万円也
信越化学社長	渡辺義助殿	一口	拾万円也
八幡製鉄社長	中部謙吉殿	二口	貳拾万円也
大洋漁業社長	高田五郎殿	一口	拾万円也
東京瓦斯社長	末松鳳平殿		五万円也
日産化学社長	高木作太郎殿		五万円也
三菱鉱産社長			

住友鋳業社長	福永年久殿	五万円也
安川電気社長	安川第五郎殿	五万円也
秩父セメント社長	諸井貫一殿	五万円也
日本鋼管社長	河田重殿	五万円也
日立製作所社長	倉田主税殿	五万円也
古河鋳業社長	新川英一殿	貳万円也
日東化学社長	藤山愛一郎殿	参万円也
富士製鉄社長	永野重雄殿	一口
味の素社長	道面豊信殿	一口
東京電力社長	高井亮太郎殿	三口
製紙会社	殿	三口
		参拾万円也

柴田徳次郎名儀寄附計画書

一、別紙土地所有証明書の通り東京都南多摩郡鶴川村字廣袴に山林七町三反十一歩を所有する。

一、此立木は薪炭用の輪伐の檜樺林である。これを以て椎茸栽培、三万本計画を立て、今春までに「ホダ」

木六千本を植込み、明春までに一万本、明後年までに完成の予定。

一、養鶏二万羽計画に着手、現在壹千羽の鶏舎と五百羽の成鶏雛鶏五百羽を有す。

以上の収益は挙げて国士館学園経営の費用に当てる。

昭和二十七年 月 日

右 柴田徳次郎

(表紙)  
「昭和二十八年年度」

収支予算表」

昭和二十八年年度収支予算総括

国士館

収 入		支 出	
学校法人	四、一八七、二〇〇・〇〇	学校法人	四、五六二、〇〇〇・〇〇
大学	一、二五三、〇〇〇・〇〇	大学	四、八七八、二〇〇・〇〇
専門学校	七二〇、〇〇〇・〇〇	専門学校	七二〇、〇〇〇・〇〇
高等学校	九三三、〇〇〇・〇〇	高等学校	九三三、〇〇〇・〇〇
中学校	七九一、〇〇〇・〇〇	中学校	七九一、〇〇〇・〇〇
計	八、三一六、二〇〇・〇〇	計	八、三一六、二〇〇・〇〇
維持員会特別会計	一八、三七五、〇〇〇・〇〇	維持員会特別会計	三、六〇〇、〇〇〇・〇〇
維持員会寄附	一口一〇〇、〇〇〇円、七〇口	短期大学經常費	一口一〇〇、〇〇〇円、一、七七五口
(内訳別紙の通り)		臨時費	一口一〇〇、〇〇〇円、一、七七五口
		計	一八、三七五、〇〇〇・〇〇



[illegible]

雜授入受

収業学験

入料金料

収

## 人

円

問

高等学校之部  
普通科

七二〇、〇〇〇・〇〇

門

計

(法人へ繰入) 給 図 教 体 交 通 印 広 消 什 修 剩  
料 書 材 育 通 信 刷 告 耗 器 備 繕 余 金

通印広消什修雑  
器耗  
繕備告刷信  
品品  
費費費費費費費

## 支

出

冂

四

七二〇、〇〇〇・〇〇

門

三三二一一二二  
五〇〇二〇二四

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
· · · · ·  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

授入受

雑授入受

計

計

業学験

収業学験

料金料

入料金料

収

収

四一  
一四、〇五、  
〇〇〇  
〇〇〇  
〇〇〇  
・・円  
〇〇〇

七九一、  
〇〇〇  
〇〇〇  
・円  
〇〇

七六  
一八、二六、  
五、〇〇〇  
〇〇〇  
〇〇〇  
・・円  
〇〇〇

九三三、  
〇〇〇  
〇〇〇  
・〇〇

中学之部

同商業科

教図給

雑点修什消広印通交体教図給

計

計

材書

器  
灯繕備告刷信通育材書  
品品

費費料

費費費費費費費費費費費費費費費料

支

支

三二  
〇五、二九〇、  
〇〇〇  
〇〇〇  
〇〇〇  
・・円  
〇〇〇

七九一、  
〇〇〇  
〇〇〇  
・円  
〇〇

一〇  
三五、一五、二〇、一〇、一八、一〇、一〇、一四、五〇、三四、  
〇〇〇  
〇〇〇  
・・円  
〇〇〇

九三三、  
〇〇〇  
〇〇〇  
・〇〇

出

出

[illegible]

〔表紙〕  
昭和二十九年  
度  
収支予算表

収 入		支 出		累 計
第一、寄附金				
維持員会寄附	七、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	第一、負債償還費	一五〇、〇〇〇・〇〇	
校友会寄附	七、七七五、〇〇〇・〇〇	第二、営繕費		
第二、繰越金		校舎建築費	一一、六二五、〇〇〇・〇〇	
第三、借入金		(建坪四六五坪、坪二五、〇〇〇円の割)		
		第三、財産購入費		
		図書購入費	一一、一〇〇、〇〇〇・〇〇	
		(三、〇〇〇冊、一冊七〇〇円の割)		
		機械器具購入費	五〇〇、〇〇〇・〇〇	
		標本購入費	四〇〇、〇〇〇・〇〇	
計	一四、七七五、〇〇〇・〇〇 円	計	一四、七七五、〇〇〇・〇〇 円	四、一八七、二〇〇・〇〇 円
				短期大学へ繰入
				計
				三、六二五、〇〇〇・〇〇 円
				四、一八七、二〇〇・〇〇 円

臨時部  
短期大学

昭和二十九年年度収支予算総括

国士館

収

入

円

支

出

円

学校法人  
大学

高等学校  
(普通科  
商業科)

中学校

計

維持員会特別会計  
寄附

(内訳別紙の通り)

計

維持員会特別会計  
短期大学經常費  
臨時費

収

入

円

支

出

円

受入  
試験料

授業料

証明書手数料

雑収  
法人より受入

給料

給料  
研究費  
旅費  
学生費  
消耗品費  
備品費  
光熱水料

二〇〇、〇〇〇・〇〇〇  
一、九二〇、〇〇〇・〇〇〇  
一、一七〇、〇〇〇・〇〇〇  
三、六一八、〇〇〇・〇〇〇

四、四三六、〇〇〇・〇〇〇  
六、六六〇、〇〇〇・〇〇〇  
七、六六〇、〇〇〇・〇〇〇  
九、六六〇、〇〇〇・〇〇〇  
一、二〇〇、〇〇〇・〇〇〇  
一、三三二、〇〇〇・〇〇〇  
二、四〇〇、〇〇〇・〇〇〇

五、五六二、〇〇〇・〇〇〇  
八、二二三、二〇〇・〇〇〇  
二、九〇〇、〇〇〇・〇〇〇  
一、二〇〇、〇〇〇・〇〇〇  
一、四〇〇、〇〇〇・〇〇〇  
四、三三二、〇〇〇・〇〇〇  
六、四三七、〇〇〇・〇〇〇  
七、五一〇、〇〇〇・〇〇〇  
八、三一〇、二〇〇・〇〇〇

雜授入受

計

# 収業学験

計

入料金料

收

一、一〇七、〇〇〇・〇〇 円

一 九  
一 七 一 一  
〇、〇、五、二、  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
・ ・ ・ ・ 円  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇

五、八三一、二〇〇・〇〇 円

高等学校  
普通科之部

[illegible]

通印廣雜  
信刷告  
費費費費  
計

支

[illegible]

五、  
八  
三  
一、  
二  
〇  
〇  
・  
〇  
〇  
円

雑 授 入 受			
収 業 学 験			
入 料 金 料			
収			
入			
四	一		
三、四、〇、五、			
〇 〇 〇 〇 〇			
〇 〇 〇 〇 〇			
・ ・ ・ ・ ・	円		
〇 〇 〇 〇 〇			
中学校之部			
通 交 体 教 図 給			
信 通 育 材 書			
費 費 費 費 費 料			
支			
出			
二	九		
一、三、二、五、			
六、六、〇、〇、〇			
〇 〇 〇 〇 〇			
〇 〇 〇 〇 〇			
・ ・ ・ ・ ・	円		
〇 〇 〇 〇 〇			
〇 〇 〇 〇 〇			

雑 授 入 受			
収 業 学 験			
入 料 金 料			
収			
入			
九	一		
五、三、〇、二、			
〇 〇 〇 〇 〇			
〇 〇 〇 〇 〇			
・ ・ ・ ・ ・	円		
〇 〇 〇 〇 〇			
同商業之部			
利 雑 点 修 什 消 広 印 通 体 教 図 給			
計 余 灯 繕 備 器 耗 告 刷 信 育 材 書			
金 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 料			
支			
出			
一、三、一、三、五、一、二、一、一、一、二、一、四、			
〇 〇 六、二、五、五、〇、五、〇、〇、八、〇、〇、五、五、四、			
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇			
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇			
・ ・ ・ ・ ・	円		
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇			
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇			



[illegible]

(表紙)  
「昭和三十年度  
収支予算」

学校法人

収	入
一、〇六二、〇〇〇・〇〇	円
学校法人	

支	出
五六二、〇〇〇・〇〇	円

昭和三十年度収支予算総括

国士館

臨時部	短期大学	第一、維持員会寄附 校友会寄附	第一、負債償還	第二、営繕費	第三、體育館建築費	第三、財産購入費	図書購入費	機械器購入費	標本購入費	計
収	入	六、〇〇〇、〇〇〇・〇〇 六、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	二〇〇、〇〇〇・〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	二、八〇〇、〇〇〇・〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	計	一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇 円
支	出									一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇 円

[illegible]

雑 授 入 受

雑 授 入 受

収 業 学 験

収 業 学 験

入 料 金 料

入 料 金 料

収

収

四、  
八 一 一  
三 〇 二 五  
〇、〇、〇、  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
・ ・ ・ 円  
〇 〇 〇 〇

三、  
二 〇 〇、  
〇 〇 〇  
〇 〇 〇 円

三、  
〇 一  
二 〇 八 〇  
〇、〇、〇、  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
・ ・ ・ 円  
〇 〇 〇 〇

体 教 図 給

雑 剩 修 什 広 消 印 通 体 教 図 給

育 材 書

器 耗  
余 繕 備 告 刷 信 育 材 書

費 費 費 料

費 金 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 料

支

支

一、  
三 三 三 四  
〇 〇 〇 四  
〇、〇、〇、  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
・ ・ ・ 円  
〇 〇 〇 〇

三、  
二 〇 〇、  
〇 〇 〇  
〇 〇 〇 円

一、  
五 八 四  
〇 〇 〇 四  
〇、〇、〇、  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
〇 〇 〇 〇  
・ ・ ・ 円  
〇 〇 〇 〇

同商業科之部

普通科之部  
高等学校

計

雜授入受

## 収業学験

計

入料料料

收

三、	○	八、	七五、
四五、	○	○	○
○	○	○	○
○	○	○	○
○	○	○	○
•	•	•	•
○	○	○	○
○	○	○	○

人

五、一〇、〇〇〇・〇〇 円

中学校之部

剩雜修什消広印通体教図給

器耗

余 繕 備 告 刷 信 育 材 書  
品 品

金 費 費 費 費 費 費 費 費 費 費 料

通印廣消什修點雜剩

器耗

余 燈 繕 備 告 刷 信  
品 品

金 費 費 費 費 費 費 費 費

支

[illegible]

出

[illegible]

[illegible]

同	臨時費
六、五〇〇、〇〇〇・〇〇	円
七、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	
計	

第十三 現在設置している学校の現況

(い) 至徳専門学校

一、学校名 至徳専門学校

二、学校の沿革

昭和四年四月専門学校令により国士館専門学校として設立、文武両道の錬成を以てその特色とした。昭和二十二年一月に至り文科本位の内容に改め、至徳専門学校と改称した。現在の専攻学科は国語科である。

三、学則

別紙の通り

四、教員

氏名	担当学科	略歴
柴田 梵天	法制、経済	校長 早稲田大学法学部卒
新田 美喜男	中国文学	元国学院大学教授

五、学生

定 員 一〇〇名 現在数 七〇名

累年卒業生数 一、四〇〇名

六、短期大学転換方針

至徳専門学校

- (一) 現在の専門学校の校舎、図書、標本、機械器具等総て短期大学に転換する。
- (二) 至徳専門学校の教員については一部の講師を除き総て短期大学に転用する。
- (三) 現在在校の生徒は専門学校として卒業せしめる。
- (四) 専門学校は昭和二十八年度以降学生を募集せず、学生が総て卒業すると同時に廃校する。

中島利一郎	国文学、言語学	早稲田大学英文学科卒
矢沢邦彦	国文学、中国文学	東京高師専攻科修身漢文部卒
内藤政光	社会学、考古学	東京帝大国史学科卒
太田定康	哲学、心理学、倫理学	東京帝大哲学科卒
根本剛	英語	東京帝大哲学科卒
神保規一	歴史	東京帝大西洋史学科卒
會田彦一	体育	東京高師体育科卒
中田剛直	国文学	東京帝大国文学科卒
国府種武	教育学	



(ろ) 国士館高等学校

一、学校名 国士館高等学校

二、学校の沿革

本校は元国士館中学校と称し大正十二年四月の設立で最初定員七五〇名の所昭和十七年定員一、〇〇〇名に変更、昭和二十年五月二十五日戦災に罹り校舎の大部分を焼失した。昭和二十三年四月学制の改変により高等学校普通科に昇格、従来の国士館商業学校（夜間）は商業科に転換し、現在普通科（昼間）、商業科（夜間）の二科よりなっている。

三、学 則 別紙の通り

四、教 員 別紙の通り

五、短期大学転換方針

転換の計画なし

(は) 国士館中学校

一、学校名 国士館中学校

至徳専門学校学則規程

第一章 総則

第一条 本校は専門学校令に依り至徳学園の本領たる智徳、勤労の精神を涵養し以て道義日本建設指導の任に堪ふる中等教員を養成するを目的とす。

第二条 本科の科目は国語科とす。

第三条 本校の修業年限は二ヶ年とす。

第四条 本校一学年に入学せしむべき定員を左の通り定む。

国語科 五〇名  
第二章 学科

第五条 学科及其の程度左の如し。

国語		
新古今集 現代文 徒然草 平家物語 増取物鏡 竹取物語	講 讀	第一学年
一八		毎週授業時数
謡古源祝万古 今氏詞葉事 曲集語命集記	講 讀	第二学年
一八		毎週授業時数

第六条
 学年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第三章
 学年学期休業日

合	体	社	法	哲	倫	外	歴	教	漢					国		
計	操	会	制	学	理	国	史	育	文	唐	大	日	史	孟	論	語
		社	法	論	倫	英	国	教	教	漢	学	本	子	語	俳	文
		会	律	理	理	語	史	育	学	文	史	外	記	語	文	学
		学	学	学	学			史	史	法	中	史			概	論
								史	史	漢	庸				紙	学
										作						
										選						
										文						
三		六				六	二	二	一八							
四																
		社	經	哲	西	英	世	教	漢	支	書	詩	老	古	左	国
		会	濟	学	洋	語	界	育	文	那	文	經	子	文	文	国
		政	学	学	倫		史	学	教	文	学	經	經	真	宝	語
		策			理			及	授	学	概			宝	伝	語
								授	演	演	論					近
								法	習	習						西
																土
																佐
																日
																記
三		六				六	二	二	一八							
四																

第七条 学年を分ちて左の二期とす。

第一期 自 四月一日  
至 十月三十一日

第二期 自 十一月一日  
至 三月三十一日

第八条 休業日は左の如し。

一、日曜日

一、大祭祝日

一、国士館創立記念日（十一月四日）

自三月二十一日

一、春季休業  
至四月五日

自七月十一日

一、夏季休業  
至九月十日

自十二月二十五日

一、冬季休業  
至一月十日

#### 第四章 入学在学退学懲戒

第九条 生徒を入学せしむべき時期は毎年四月とす。

第十条 本科第一学年に入学し得べきものは左の各号の一に該当するものにして本校に於て詮衡したるものに限る。

一、高等学校卒業者

二、専門学校入学者検定規定に依り指定せられたるもの

三、同規定に依る試験に合格したるもの

第十一条 入学せんとするものは別に定むる様式の入学願書、履歴書、戸籍抄本及び写真に査料を添え願出すべし。

第十二条 入学許可を受けたるものは別に定むる様式の誓約書を保証人連署の上差出すべし。

第十三条 生徒は本校寄宿舎に入舎するを原則とす。

第十四条 止むを得ざる事由の為休学せんとするものは其の証明書及事由を詳記し願出の上許可を受くべし。

第十五条 休学の許可を受けたる者は休学中の授業料は此を免除することあるべし。

第十六条 退学せんとするものは其の事由を具し願出の上許可を受くべし。

第十七条 保証人は能力者にして本校より一里以内に居住するもの若くは東京都に在住するものにして適

当と認めたる者たるべし。

第十八条 保証人を変更したる場合又は其の氏名住所を変更したる時は其の都度届出ずべし。

第十九条 欠席者は其の事由を具し届出ずべし。但し病気の為欠席七日以上に及ぶ場合は校医の診断書を

添ふることを要す。

第二十条 生徒の本人に悖りたる行為ありと認むる時は其の輕重に従ひ譴責、停学、除名処分に付す。

## 第五章 試験及卒業

第二十一条 各科の試験は各学科目に付き各学期度の終りに行ふ。

第二十二条 各学科目の成績は百点を満点とし六十点以上を合格とす。

第二十三条 毎年度に配当せる学科目中不合格の学科三科目以上あるときは進級せしめず。

第二十四条 病氣其の他止むを得ざる事由に依り試験を受くることを得ざりし者には第一学期中に追試験を行ふことあるべし。

第二十五条 卒業者には所定の卒業証書を授与す。

## 第六章 授業料及手数料

第二十六条 入学せんとするものは入学査料金五百円を納付することを要す。

第二十七条 入学を許可せられたるものは入学金壹千円を納付することを要す。

第二十八条 授業料は一ヶ年金七千円とす。

第二十九条 学年試験料は之を徴収せず。但し追試験を行ふ場合は一学科目金百円以内の試験料を徴集す。

第三十条 証明書の下附には金五十円を徴収す。

第三十一条 一旦納付せる授業料及諸料金は一切之を返還せず。

第三十二条 本校教授会職員制生徒心得に関する事項及本学則施行細則は別に之を定む。

## 国士館高等学校学則（普通科）

### 第一章 総則

第一条 本校は教育基本法学校教育法に基き男子に高等普通教育を施し文化国家建設に堪ふる有為な指導者として必要な資質を育成するを以て目的とす。

第二条 本校の修業年限は三箇年とす。

### 第二章 学年学期休業日

第三条 学年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第四条 学年を分ちて左の三学期とす。

第五条 休業日は左の如し。

- 第一期 四月一日より八月三十一日に至る
- 第二期 九月一日より十二月三十一日に至る
- 第三期 一月一日より三月三十一日に至る

一、日曜日

二、祝日、大祭日

三、本校創立記念日（十一月四日）

四、夏季休業 七月二十一日より八月三十一日に至る

五、冬季休業 十二月二十五日より翌年一月七日に至る

六、学年末休業 凡そ一週間

前項の外伝染病予防又は其の他の非常変災の場合に於ては臨時休業することあるべし。但し急迫の事情あるときは学校長に於て休業となし此場合は直に都長官に報告す。

第六条 始業時間は左の如し。

午前八時始業 但し時宜により変更することあり。

第三章 学科課程及教授時数



第七条
     学科目は国語、一般社会、体育、漢文、世界史、人文地理、時事問題、解析（Ⅰ）、解析（Ⅱ）、

幾何、物理、化学、生物、地学、図画、英語、農業とする。

第八条
     学科課程及毎週教授時数左の如し。

学科課程及毎週教授時間表

学 科 課 程				
必修教科	国 語			315 (9)
	一般社会			175 (5)
	体 育			315 (9)
選 択 教 科	国 語			210 (6)
	漢 文			210 (6)
	社 会	世界史	東洋史	175 (5)
			西洋史	175 (5)
		人文地理		175 (5)
		時事問題		175 (5)
	数 学	解析 (Ⅰ)		175 (5)
		解析 (Ⅱ)		175 (5)
		幾 何		175 (5)
	理 科	物 理		175 (5)
		化 学		175 (5)
		生 物		175 (5)
		地 学		175 (5)
		図 画		210 (6)
	外国語	英 語		525 (15)
	農 業			
	学 習 総 時 数			

第四章
     課程の終了<sup>修</sup>及卒業

第九条
     各学年の終了<sup>修</sup>又は全学科の卒業を認むるには学業の成績を調査し平素の操行を参考にして之れを

定む。

第十条 学業の成績は平素の成績考査の成績に依り之れを査定す。

但し正当の理由ありて考査に欠席したるものに対しては左の方法の一を選ぶことを得

一、特に追考査を行ふことあるべし。

一、平素の学業の成績のみを考査して学校長の見込により考査を行はざることあるべし。

第十一条 考査を分ちて学期考査及学年考査とし学期考査は其学期間に学習したる学科目に就き各学期末

に於て之を行ふ。学年考査は其学期間に学習したる学科目に就き学年末に於て之を行ふ。

第十二条 学業の成績は標語を以て表はし之を五段階に分つ。

第十三条 成績考査の結果は学期末及学年末に之れを通知簿に依り保証人に通知す。

第十四条 第三学年の課程を修了したるものには所定の書式の卒業証書を授与す。

#### 第五章 生徒の入学退学休業

第十五条 入学を許可する人員及期日等に就ては其都度学校長之れを告知す。

第十六条 生徒の入学期は学年の始めより三十日以内とす。

但し欠員あるときは第二学期初めより十日以内に臨時入学せしむることあるべし。

第十七条 入学を許可すべきものは品行方正心身の發育充分なるものにして左の各項に該当するものとす。

一、第一学年に入学することを得るものは新制中学校卒業生及び之と同等以上の学力を有し中学校  
学校長の推薦を得たるものにして身体検査を行い詮議の上之れを許可す。

但し志願者募集人員を超過する時は其の学習能力を試験し入学者を選抜す。

二、第二学年以上の学年に入学することを得るものは前学年（前学期）修業の程度に依り施行する  
入学試験に合格したるものとす。

三、他の学校より転学せんとするものあるときは詮議の上能力に依りて相当学年に編入することあ  
るべし。

四、退学したるもの一ケ年以内に再入学を出願する時は欠員ある場合に限り詮議の上同学年に編入  
すべし。

第十八条 入学志願者は所定の書式に依り出身学校長經由にて入学願書を差出すべし。

第十九条 入学の許可を得たるものは直ちに保証人を定め在学保証書に戸籍抄本及入学料を添へて差出すべ  
し。

第二十条 保証人は生徒に関する一切の事件を引受くるに足るべき者に限る。

学校長は前項の保証人を不適當と認めたる時は之を変更せしむることあるべし。

第二十一条 生徒の保証人に於て住所氏名を変更し又は改印したるときは直に学校長に届出づべし。

第二十二條 保証人は旅行其の他の事故により直接監督を為し難き場合に於ては相当の代理人を定め学校長

に届出づべし。

第二十三條 左の場合に於ては新に保証人を定め更に在学保証書を差出すべし。

一、保証人の死亡又は三ヶ月以上旅行をなす時

一、保証人第二十条の資格を喪失し又は本校に於て不適當と認めたる時

第二十四條 疾病其他止むを得ざる事項に依り退学若くは転校せんとするものは其事由を具し保証人連署の

上学校長に願出すべし。

第二十五條 学校長は左の各項の一に該当するものに退学を命ずべし。

一、品行不良にして改善の見込なしと認めたる者

一、学力劣等にして成業の見込なしと認めたる者

一、身体薄弱にして学業に堪へずと認めたる者

一、正当の理由なくして引続き一ヶ月以上欠席したる者

一、出席常ならざる者

一、保証人其の責務を果さざる時

一、休業の事項止みたる後正当の事由なくして二週間以内に出席せざる者

第二十六条 生徒疾病又は已むを得ざる事故に依り欠席一ヶ月以上に及ぶ時は学校長は一ヶ年以内の休学を許可することを得。

第二十七条 疾病又は已むを得ざる事情に依り欠席遅刻早引を為す時は理由を附して保証人より届出づべし。

但し欠席一週間以上に亘る時は保証人連署を以て病氣は医師の診断書を添へ最初より一週間に内に届出づべし。

#### 第六章 褒賞及懲戒

第二十八条 学校長は品行方正にして学力優等の者及教育上必要と認めたる時は生徒を褒状することあるべし。

第二十九条 学校長は本校生徒たるの体面を汚辱する行為ありたる者及教育上必要と認めたる時は生徒に懲戒を加ふることあるべし。

第三十条 懲戒を分ちて譴責謹慎停学放校の四種とす。

第三十一条 生徒にして校物を毀損又は紛失したる時は其情状に依り現品又は其代償の一部若くは全部を賠償せしむることあるべし。

第七章 授業料及入学検査料・入学料

第三十二条 授業料は一ヶ月五百円とし八月を除き毎月五日迄に納付すべし。

但し一学期分又は一年分を前納することを得

第三十三条 授業料納付前に退学し又は納付後に入学する者は其都度授業料を納付すべし。

第三十四条 生徒休学若くは停学を命ぜられ又は疾病其他の事故に依り欠席するも在学中は授業料を徴収す。但し休学者は休学を許可せられたる翌月より出席の前月迄半額とす。

第三十五条 授業料の滞納五日に及びたる者に対しては其納付を了するまで授業を停止することあるべし。停止後尚授業料を納付せずして翌月に渡りたるものは退学を命ずることあるべし。

第三十六条 入学志願者は入学検査料として金貳百円を納付すべし。

第三十七条 入学を許可せられたる者は入学料金参百円を納付すべし。

第三十八条 既納の学費は如何なる理由ありと雖も之れを返付せず。

第八章 制服

第三十九条 本校生徒の制服は之れを定む。

生徒心得五箇条

一、本校生徒たるものは真理と正義を重んじ信義礼節を尊び質素儉約を旨とし以て青年学生模範たること

を期すべし。

一、教師を尊敬し同僚相親み年少学生を善導すべし。

一、身体を強健にし豪氣不屈の精神を養い勤労と責任を重んずべし。

一、時間を励行し約束を重んじ最も規律正しく生活をなすべし。

一、社会公共の為に貢献する公德心の養成に努むべし。

## 国士館高等学校学則（商業科）

### 第一章 総則

第一条 本校は新制高等学校規程に基き商業に関する須要なる専門技能教育を施し且民主的な公民としての徳性と智能とを涵養するを以て目的とする。

第二条 本校の修業年限を四ヶ年とし夜間全日制である。

第三条 本校の授業時間は午後五時より同九時迄とする。

### 第二章 学科課程及授業時数

第四条 本校に於て授くる学科目は社会、国語、漢文、作文、習字、数学、地理（歴史）博物、図画、商業経済、簿記、会計、実践経済法規、物理、化学、工業及資材実習及体育とする。

第五條 学科課程及授業時数は、次の表の通りである。

科目	実務実習	商業経済	法規	簿記会計	工業資材	国語	社会	体育	数学	理科	漢文	英語	統計	合計
一年	一四〇(4)	七〇(2)		七〇(2)		一〇五(3)	七〇(2)	七〇(2)	七〇(2)	七〇(2)	三五(1)	一四〇(4)		八四〇(24)
二年	一七五(5)	七〇(2)	七〇(2)	七〇(2)		七〇(2)	三五(1)	七〇(2)	七〇(2)	三五(1)	三五(1)	一四〇(4)		八四〇(24)
三年	一七五(5)	七〇(2)	三五(1)	七〇(2)	七〇(2)	七〇(2)	三五(1)	三五(1)	七〇(2)	三五(1)	三五(1)	一四〇(4)		八四〇(24)
四年	一七五(5)	七〇(2)	三五(1)	七〇(2)	七〇(2)	七〇(2)	七〇(2)	三五(1)	三五(1)	七〇(2)		一四〇(4)	〇三五(1)	八四〇(24) 〇三五(1)
計	六六五(19)	二八〇(8)	一四〇(4)	二八〇(8)	一四〇(4)	三一五(9)	二一〇(6)	二一〇(6)	二四五(7)	二一〇(6)	一〇五(3)	五六〇(16)	〇三五(1)	三三六〇(96) 〇三五(1)

○印は選択科目（三五週とする）



第二章<sup>(三)</sup> 学年学期及休業日

第六条 本校の学年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第七条 学年を分ちて左の三学期とす。

第一学期 自四月一日 至 八月三十一日

第二学期 自九月一日 至十二月三十一日

第三学期 自一月一日 至 三月三十一日

第八条 本校の休業日を左の通り定むる。

一、大祭祝日

二、日曜日

三、本校創立紀念日 十一月四日

四、春季休業 自三月二十一日 至三月三十一日

五、夏季休業 自七月二十一日 至八月三十一日

六、冬季休業 自十二月二十一日 至一月七日

但し学校長は事情により変更することを得る

#### 第四章 入学及退学

第九条 入学期は学年の始めとする。

但し時期により臨時入学を許可することがある。

第十条 第一学年に入学を許すべきものは年令満十五才以上にして新制中学校を卒業又は之と同等以上の学力を有し身体健全操行善良なるもの。

第十一条 前条の入学志願者募集人員を超過したるときは新制中学校卒業程度により学科、人物試験を行い入学者を選抜する。

第十二条 第二学年以上に於て欠員あるときは相当年令に達し入学資格ある者に本校前学年主要学科目の試験を課し之に合格したる者を入学せしむる。

第十三条 入学志願者は第一号書式の入学願書及第二号書式の履歴書に入学試験手数料金を添えて提出すること。（願書及履歴書用紙は学校にあり）

第十四条 他の商業学校より転学をせんとする者あるときは該学校長の在学証明書及試験成績表を差出さしめ欠員ある場合に限り無試験にて第三学年以下の相当学年に編入する。

但し学科目の配当を異にする場合は其学科目の試験に合格したる者たるべし。

第十五条 入学を許可せられたるものは戸籍抄本及第三号書式の在学保証書に入学金を添えて入学手続きす

ること。(保証書用紙は学校より交付す)

第十六条

保証人は生徒の父母後見人若くは丁年以上の一家を成せる男子にして京浜地区内に居住し本人の身上に関する一切の責に任じ得べきものたること。

第十七条

保証人死亡し又は前条の資格を失ふに至りたるときは更に之を選定し速に第三号書式の在学保証書を差出すこと。

第十八条

疾病又は其他已むを得ざる事故により退学せんとするものは其の事由を詳記し保証人連署の上願出すべきこと。

但し疾病の場合には医師の診断書を添付すること。

第十九条

左の各号に該当する者は退学を命ずる。

- 一、品行不良にして改善の見込なしと認めたるもの
- 二、学力劣等にして成業の見込なしと認めたるもの
- 三、引続き一ヶ年以上欠席したるもの
- 四、正当の事由なくして一ヶ月以上欠席したるもの
- 五、出席常ならざるもの
- 六、授業料を滞納し督促を受くるも尚納付せざるもの

## 第五章 学費

第二十条 授業料（校友会費月額二〇円を含む）は年額金五千四十円とし左記割当により分納せしむ。

第一期分 金二、一〇〇円 四月二十日限り

第二期分 金一、六八〇円 九月二十日限り

第三期分 金一、二六〇円 一月三十日限り

但し学校長の許可を得て月額（金四二〇円）を毎月十日迄に分納することを得る。

第二十一条 本校の休業全学期間に亘るとき若くは疾病其他已むを得ざる事故に依り予め届出の全学期に亘り休業するときは其学期の授業料を徴集しない。

第二十二条 前条の場合の外疾病其他の事故により欠席することあるも在学中は授業料を徴収する。但し一旦納付したる授業料及入学試験手数料入学金は如何なる事由あるも返付しない。

## 第六章 成績査定

第二十三条 各年各科目の成績は学年評点により之を定むる。

第二十四条 学年評点は平素の成績及試験成績を考査し之を定むる。

第二十五条 試験を分ちて学期試験及学年試験とす。

第二十六条 学期試験は第一期及第二学期末に於て該当する期間に履習したる課程に付之を行ふ。

学年試験は第三学期に於て該当する期間に履習したる課程に付之を行ふ。

第二十七条 学科目の性質に依り平素の成績を以て試験成績に代ることがある。

第二十八条 学業成績は総て点数を以て表示し百点を満点とし各学科目四十点以上平均六十点を合格とする。

第二十九条 最終学年の課程を終り所定の学科単位を修得したるものには卒業証書を授与する。

#### 第七章 選科生

第三十条 本学科目中のある学科目を選修せんとするものを選科生とする。

但し選科生は本科教授上差支なき場合に限り入学を許可する。

第三十一条 選科入学志願者は第五号書式の入学願書及第二号書式の履歴書に入学試験手数料を添えて差出すこと。

第三十二条 所定の課程を卒りたる選科生には修業証書を授与する。

#### 第八章 特待生

第三十三条 品行方正学術優良なるものは特待生として授業料を免除することがある。

#### 第九章 賞罰

第三十四条 学力優等品行方正にして他の模範となるに足るものには賞状若くは賞品を授与する。

第三十五条
 生徒たるの本分に悖る行為ありたる者は懲罰に処する。

懲罰は譴責、謹慎、停学、及放校の四種とする。

第十章

第三十六条
 本則施行上必要なる細則は学校長之を定むる。

附則

本則は昭和二十三年四月一日より施行する。

国士館高等学校職員表

担任	学科目	最終学歴	氏名	備考
社	会	早稲田大学法学部卒	柴田梵天	
英	語	東京大学文学部英文科卒	根本剛	
国	語、漢文	検定	新田興	
社	会	日本大学高等師範部卒	川本喜三郎	
保健、体育		国士館高等部卒	小川忠太郎	
生	物	岡山師範卒	影山藤作	
数学、理科		物理学校卒	原重信	
国語、社会		国学院大学卒	星川進	
英	語	早稲田大学卒	宮崎茂	
図画		葵橋研究所	宮嶋熊蔵	
保健、体育		東京高等師範卒	會田彦一	
商業簿記		中央大学卒	中根実子	

数学、理科	物理学学校卒	前岡彰	
英語	東京大学卒	新田大作	
商業簿記	明治大学卒	勝山公夫	
人文地理	日本大学卒	中野春夫	
物理	東京大学卒	櫻井信次郎	
英語、数学	攻玉社中卒	篠瀬玉造	
生物	東京高等師範卒	新田豊人	
商業経済	法政大学卒	高橋敏美	
簿記、商業経済	明治大学卒	青木繁	
商業	中央大学卒	中川清太郎	
数学	日本大学卒	南雲秀夫	
珠算	法政大学卒	樋口敬治	
教務課	早稲田実業卒	松尾昇次郎	
会計課	国士館高等学校卒	鈴木隆且	

国士館中学校学則

第一章 総則

第一条 本校は日本国憲法 of 精神に則り人格の完成を期し併せて身心の健全なる国民を教育することを目的とする。

第二条 本校は国士館中学校と称し東京都世田谷区世田谷一の一〇〇六番地に置く。

第二章 修業年限及び入学資格

第三条 本校の修業年限は三ヶ年とする。

第四条 本校の定員百五拾名とする。

第五条 本校第一学年に入学を許されるものは年令十二歳以上にして小学校第六学年の課程を卒えた者またはこれと同等以上の学力であることを要する。

第六条 本校の第二学年以上に入学を許される者は相当の年令に達し、且前学年の課程を卒えた者またはこれと同等以上の学力を有する者でなければならない。

第三章 学科課程及び授業時数

第七条 学科課程及び授業時数は左の通りである。

学 科	第一学年	第二学年	第三学年	摘 要
国 語 科	一四〇(四)	一四〇(四)	一四〇(四)	カッコ内は一週授業時数
習 字 科	三五(一)	三五(一)		
社 会 科	一七五(五)	一四〇(四)	一四〇(四)	
国 史 科		三五(一)	七〇(二)	
数 学 科	一四〇(四)	一四〇(四)	一四〇(四)	
理 学 科	一四〇(四)	一四〇(四)	一四〇(四)	
音 楽 科	七〇(二)	七〇(二)	七〇(二)	
図画工作科	七〇(二)	七〇(二)	七〇(二)	
体 育 科	一〇五(三)	一〇五(三)	一〇五(三)	



職 業 科	七〇(二)	七〇(二)	七〇(二)	
英 語 科	一七五(五)	一七五(五)	一七五(五)	
合 計	一、一二〇(三二)	一、一二〇(三二)	一、一二〇(三二)	

第四章 学年学期及び休業日

第八条 学年は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第九条 学年を便宜上別けて三学期とするが授業日数の計算或は生徒の成績判定を拘束するものではない。

第一学期 四月一日より八月卅一日まで

第二学期 九月一日より十二月卅一日まで

第三学期 一月一日より三月卅一日まで

第十条 休業を左の通り定める。

一、祝日

一、日曜日

一、本校創立記念日

一、夏季休業

一、冬季休業

一、学年末休業

第五章 考查及び修了、卒業

第十一条 各学年の課程の修了又は卒業は平素学科の出席時数及び学業成績を考查して定める。

第十二条 考查は別段の期日、回数を定めず各科目毎にこれが理解の程度を測るために随時に行うを本体とす。

第十三条 学業成績は評語で表す。

第十四条 欠席により規定の授業時数に達しないものはこれが補充を行はせる。

第十五条 全学科課程を修了した者には卒業証書を与える。

第六章 入学、転学及び退学

第十六条 入学は学年の始より三十日以内に許可するを原則とする。

但し欠員ある時は学期の始めに臨時入学を許可する。

第十七条 本校に入学を希望するものは入学願書を提出しなければならない。希望者の数が募集人員を超過した時は適当な方法によって入学を定める。

各学年への編入学及び転入学希望者に対してはその成績と人物を考查した上之を許可する。

第十八条 編入学希望者の手続は前条に準ずる。

転入学を希望するものは前段の外転入学の理由を記した書面及び在学せる校長の紹介状を必要とする。

第十九条 他校に転学を希望するものは保証人よりその理由及び入学したい学校の所在地、名称、学年を明記した願書を差出さねばならない。

第二十条 入学を許されたものは直に保証人を定め在学保証書を差出さねばならない。

第二十一条 保証人が死亡した時変更されたとき転居した時は速に学校に其旨を届けねばならない。

第二十二条 退学しようとするものはその理由を記し保証人連署の上で願出なければならない。

一旦退学したものが退学した日より一ケ年以内に再入学を願出た時には詮議の上、原学年以下の学年に入学することを許されることがある。

第二十三条 欠課、欠席、遅刻、早退をした時は直にその理由を記して保証人より届出なければならない。

#### 第七章 授業料及び入学査料、入学金

第二十四条 授業料は一ヶ月金二〇〇円とする。

第二十五条 授業料は毎月五日迄に出席の有無に拘らず納付しなければならない。

第二十六条 入学査料は金二〇〇円とし入学願書に添えて納付しなければならない。

第二十七条 入学金三〇〇円とし入学を許可された時在学保証書に添えて納付しなければならない。

第二十八条 既に納付した授業料その他の諸学費はどのような理由があっても返付しない。

## 第八章 賞罰

第二十九条 品行方正、思想健全、且学力優等で他生徒の模範となるべき者には褒賞を与えることがある。

第三十条 学校長は教育上必要と認めた時は生徒に左の懲戒を加えることがある。

- 一、説諭
- 二、謹慎
- 三、停学
- 四、退学

第三十一条 成業見込のないもの引続いて六ヶ月以上欠席した者、無届で一ヶ月以上欠席した者、授業料の滞納三ヶ月に及んだ者等は学籍から除かれることがある。

第三十二条 校有物を破損または亡失した者には現品若しくは錢でこれを賠償させることがある。

## 第九章 職員組織及び服務規定

第三十三条 本校に左の職員を置く。

校長	一名	教頭	一名	教員	若干名
----	----	----	----	----	-----

学監	一名	事務員	若干名
----	----	-----	-----

第三十四条 校長は職員を統率<sup>(率)</sup>し本校全般に関する管理を掌る。

第三十五条 教頭は校長を補佐し教務に関する事項を管掌し教員を指導する。また学校長事故ある時はその職務を代行する。

第三十六条 学監は学校の計理、庶務に関する事項を管理し事務員を指導する。職員の服務に関する規定は別にこれを定める。

補則

第三十七条 本学則施行に関する細目は校長がこれを定める。

以上

第十四、将来の計画

(一) 学科の組織に關すること。

(イ) 施設、設備、教授陣を充實し短期大学を四年制大学に轉換する予定である。

(ロ) 学科については現学科の外将来更に体育科を加へ三学科とする。

(二) 学科目又は担当教員に關すること。

現在の学科目教職員等も必要に応じて拡充し、教員を用意する。

(三) 校地、校舎等に關すること。

校舎は現在の校舎の外、二十八年度中に罹災地あとに二階建教室四百坪を建築し屋内体操場を添付の略図の通り九十六坪を教室三に改造して本学使命の達成に遺憾のないように準備する。

(四) 図書、標本、機械、器具に關すること。

図書、標本、機械、器具等は毎年予算を計上して現在の補充を速かに完成すると共に教育の完遂を期して教材の補充に努力する。

追加

(三) 校地校舎に関すること。

校舎については左の通り追加改造を行ふ。

一、図書館を別紙添付の図面の通り改造を行ふ。

即ち図書閲覧室中西側に研究室三室を増設する。之れは教員の特別閲覧室を兼ねるものである。

第十五、併設の場合の調

至徳専門学校設置要領

一、目的

本校は専門学校令に依り至徳学園の本領たる智徳、勤労の精神を涵養し以て道徳日本建設指導の任に堪ふる中等教員を養成するを目的とする。

二、名称

至徳専門学校

三、位置

東京都世田谷区世田谷一丁目千六番地

四、校地総坪数

一一、二八九坪

五、校舎等建物総坪数

一〇〇八坪二合五勺

六、図書、標本、機械器具等施設概要

昭和二十年五月廿五日戦災により疎開中の図書、標本、器具類の一部を残し、他を焼失したが、爾来学園一致協力のもとに着々その補充に努めている。

七、学科組織

別紙学則通り

八、履修方法概要

別紙学則通り

九、職員組織

校長、教頭、教授、助教授、講師、事務員

十、学科別生徒定員

国語科 一〇〇名

十一、設置者

学校法人 至徳学園

十二、維持経営の方法概要

授業料、学校法人借入金、寄附金、政府の補助金、貸付金等により経営している。

一、高等学校設置要領

一、目的

教育基本法学校教育法に基き男子に高等普通教育及び商業に関する教育を施し人格の完成、学術技能の修練により文化国家の建設と商業日本建設とに堪ゆる有為な人物を育成するを以て目的とす。

二、名称

国士館高等学校

三、位置

東京都世田谷区世田谷一丁目一、〇〇六番地



四、校地

総坪数 一一、二八九、三五坪

五、校舎等建物総坪数 五三〇、八四

六、図書、標本、機械、器具等施設概要

昭和二十年五月二十五日戦災に罹り疎開中の図書、標本、機械、器具類の一部を残しその他大部分を焼失し爾来学園一丸となり一致協力のもとに着々その補充に活躍してゐる。

七、学科組織

学 科 課 程				
必修教科	国 語			315 (9)
	一般社会			175 (5)
	体 育			315 (9)
選 択 教 科	国 語			210 (6)
	書 道			210 (6)
	漢 文			210 (6)
	社 会	世界史	東洋史	175 (5)
			西洋史	175 (5)
		人文地理		175 (5)
		時事問題		175 (5)
		解析 (Ⅰ)		175 (5)
		解析 (Ⅱ)		175 (5)
		幾 何		175 (5)
		物 理		175 (5)
		化 学		175 (5)
		生 物		175 (5)
		地 学		175 (5)
	図 画			210 (6)
	外 国 語			525 (15)
	農 業			
学 習 総 時 数				

## 商業科学科課程表（三五週とす）

計	○統計	英語	漢文	理科	数学	体育	社会	国語	工業資材	簿記会計	法規	商業経済	実務実習	科目
八四〇 (24)		一四〇 (4)	三五 (1)	七〇 (2)	七〇 (2)	七〇 (2)	七〇 (2)	一〇五 (3)		七〇 (2)		七〇 (2)	一四〇 (4)	一年
八四〇 (24)		一四〇 (4)	三五 (1)	三五 (1)	七〇 (2)	七〇 (2)	三五 (1)	七〇 (2)		七〇 (2)	七〇 (2)	七〇 (2)	一七五 (5)	二年
八四〇 (24)		一四〇 (4)	三五 (1)	三五 (1)	七〇 (2)	三五 (1)	三五 (1)	七〇 (2)	七〇 (2)	七〇 (2)	三五 (1)	七〇 (2)	一七五 (5)	三年
○ 八四〇 三五 (1) (24)	○ 三五 (1)	一四〇 (4)		七〇 (2)	三五 (1)	三五 (1)	七〇 (2)	七〇 (2)	七〇 (2)	七〇 (2)	三五 (1)	七〇 (2)	一七五 (5)	四年
○ 三三六 三五 (1) (96)	○ 三五 (1)	五六〇 (16)	一〇五 (3)	二一〇 (6)	二四五 (7)	二一〇 (6)	二一〇 (6)	三一五 (9)	一四〇 (4)	二八〇 (8)	一四〇 (4)	二八〇 (8)	六六五 (19)	計

○印は選択科目

八、履修方法概要

学科の選択は物理、科学、生物、地学につき集団法により学習し他は個定学級の授業を行つてゐる。なお生徒の能力と発達とを考慮し研究学習に興味をもち自発的活動により学習を進めるようにしてゐる。

九、職員組織概要

教務主任（兼庶務）

教務係

校長

会計主任

会計係

各教職員

生徒会主任

野球部長

十、学科別生徒定員

普通科

一五〇名

商業科

二〇〇名

十一、設置者

学校法人国士館（東京都世田谷区世田谷一丁目一、〇〇六番地）

十二、維持経営の方法概要

授業料、学校法人借入金、寄附金、政府の補助金、貸付金等により経営してゐる。

## 国士館中学校設置要領

### 一、目的

本校は日本国憲法<sup>(建)</sup>の精神に則り人格の完成を期し併せて身心の健全なる国民を教育することを目的とする。

### 二、名称

国士館中学校

### 三、位置

東京都世田谷区世田谷一丁目千六番地

### 四、校地総数 一一、二八九坪

### 五、校舎等建物総坪数

一〇〇八坪貳合一勺

### 六、図書、標本、機械器具等施設概要

昭和二十年五月二十五日戦災により疎開中の図書、標本、器具類の一部を残し、他を焼失したが爾来学園一致協力のもとに着々その補充に努めている。

### 七、学科組織 別紙学則の通り

八、履修方法概要 別紙学則の通り

九、職員組織概要

校長、教頭、学監、教員、事務員

十、生徒定員 百五十名

十一、設置者 学校法人 至徳学園

十二、維持経営の方法

授業料、学校法人借入金、寄附金、政府の補助金、貸付金等により経営している。

〔添付図面、略〕

＊1 国士館短期大学 戦後、国士館が大学創設を目指して踏み出すことになる第一歩が、一九五二

（昭和二七）年の短期大学設置申請である。国文科と経済科（二部）を設置し、修業年限二年、定員各四〇人、学長には柴田徳次郎が就任した。あわせて、法人及び中学校・高等学校と共に、至徳学園から国士館の名称に復した。申請書には、必要一五項目が整えられているが、その中で特に注目されるのは「一四、将来の計画」であろう。短期大学は将来四年制大学に転換すること、現学科の他に体育科を増設することが、申請書段階で明文化されており、確固たる方向性が示されている。

また、短期大学の専用校舎として、一九五四（昭和二九）年一月に木造二階建の校舎（三号館、現正門付近）が完成する（口絵「完成した短期大学校舎」参照）。

国文科では、国文学と共に中国文学を重視した。一方、経済科（二部）では、広く勤労学生に門戸を開き、特に新設された保安隊（現自衛隊）や警視庁、自治体警察などで勤務する者を積極的に受け入れた（口絵「経済科（二部）の授業風景」参照）。

また、一九五四年一月には、国文科に中学校・高等学校国語（二級）、経済科に中学校・高等学校商業（二級）の教育職員免許状の資格認定を受けた。そして、一九五七（昭和三一）年三月には、国士館初めての女子学生六名が卒業する（口絵「短期大学第三期卒業生」参照）など、時代と共に新たな歩みを進めて行った。